全訳

芥子園畫傳

第十冊
第十一冊合冊

301
合
40

始

全譯

芥子園畫傳

第十冊

草蟲花卉譜（上冊）

405

301
40

小杉放庵 註解
公田連太郎 譯文

全譯 芥子園畫傳

第十冊 草蟲花卉譜（上冊）

東京 アトリエ社刊行

昭和一〇・三・廿

301-40

序

辛巳夏。余南歸丈園。欲招王子宓草共數晨夕。宓草以編葺芥子園畫傳未竣辭。越四月。其書始成。且復首別源流秘傳訣式。觀其自序。前集蘭竹梅菊。既以學字之法學畫。茲則更以學詩之法。詳及鳥獸草木。用意深矣。自余觀之。鳥獸草木。與畫者之鳥獸草木。豈有異哉。鳥獸有飛有潛者也。草木有色有香者也。飛潛不生于動而生于靜。香色不生于有而生于無。是畫者適還無飛潛無色香之本體。何也。飛潛不能久存。色香終于寂滅。畫者與眞者。又何可異視乎。畫龍者。以點睛而能飛。是畫未始無飛潛也。畫荷者。以風飄而露滴。是畫未始無香色也。安見幻者不可爲眞。而眞者不可爲幻哉。其兄安節有畫傳初集。已發烟雲丘壑之奧。今此譜繼出。是安節志在窮高極遠。而宓草志在研精入微。二君皆從繪事以格物者哉。時

康熙辛巳歲長至前一日。邾城王澤弘。題于思匡閣。

【譯】辛巳の夏、余、南のかた丈園に歸り、王子宓草を招きて數晨夕を共にせんと欲す。宓草、芥子園畫傳を編葺して未だ竣らざるを以て辭す。越えて四月、其書始めて成る。且つ復た首に源流・秘傳・訣式を別つ。其自序を觀るに、前集の蘭竹梅菊は、既に字を學ぶの法を以て畫を學ぶ。玆には則ち更に詩を學ぶの法を以て、詳かに鳥獸草木に及ぶ。意を用ふること深し。余より之を觀れば、鳥獸草木と、畫者の鳥獸草木と、豈に異なる有らんや。鳥獸は飛有り潛有る者なり。草木は色有り香有る者なり。飛潛は動に生ぜずして靜に生じ、香色は有に生ぜずして無に生ず。是れ畫ける者は適に飛潛無く色香無きの本體に還るなり。何ぞや。飛潛は久しく存すること能はず、色香は寂滅に終る。畫ける者と眞なる者と、又何ぞ異視す可けんや。龍を畫ける者は、晴を點ずるを以てして能く飛ぶ。是れ畫は未だ始より飛潛無きにあらざるなり。荷を畫ける者は、風飜すを以てして露滴る。是れ畫は未だ始より香色無きにあらざるなり。安んぞ幻なる者は眞と爲す可からずして、眞なる者は幻と爲す可からざるを見んや。其兄安節、畫傳初集有り、已に烟雲丘壑の奥を發せり。今、此譜繼ぎて出づ。是れ安節の志は高を窮め遠を極むるに在り、而して宓草の志は精を研き微に入るに在り。二君は、皆、繪事に從つて以て格物する者なるかな。時に康熙辛巳の歲、長至の前一日、邾城の王澤弘、思匡閣に題す。

【註】共數晨夕、數日の間、一處に居ること。○編葺、編輯と同じ。○越四月、四箇月の後。○飛潛不生于動而生于靜、香色不生于有而生于無、靜を本體とし、動を活用とし、無を本體とし、有を活用とするなり。靜寂虛無にして、飛潛無く、色香無きの本體有りて、始めて鳥獸は飛潛し、草木は色香有るの活用を得べしと言ふなり。○異視、相異なりたる者として視るなり。○荷、蓮の葉。○安見幻者不可爲眞、而眞者不可爲幻哉、假なる者にして眞に似たるを幻と曰ふ。幻なる者も眞なる者と爲すことを得可く、眞なる者も幻なる者と爲すことを得可きを言ふ。幻なる者も眞なる者も必ずしも相異なりたる者に非ずとなり。○初集、第一冊總說より第五冊摹倣名家畫譜に至るまでを言ふ。因に記す、第六冊蘭譜より第九冊菊譜に至るまでを第二集とし、第十冊草蟲花卉譜上冊(卽ち此冊)より第十三冊翎毛花卉譜下冊に至るまでを、第三集とするなり。○格物、物に至ると訓す。四書の大學に謂はゆる八條目の一つなり。大學に三綱領・八條目あり。三綱領とは明二明德一・新レ民・止二至善一の三條なり。八條目とは格レ物・致レ知・誠レ意・正レ心・修レ身・齊レ家・治レ國・平二天下一の八條なり。格物は、朱子の說によれば、格は至るなり、物は猶ほ事のごときなり。事物の理を窮め至りて、其極處到らざる無からんことを欲するなり。萬事萬物の理を窮めて其至極の處に至らんとするを言ふ。格物に就きては別に王陽明の學說有り、朱子の言ふ所と大に異なれども、今の此文は朱子の說に從つて此字を用ひたるなり。○長至、此語は、日の長きこと至るの意に解して夏至にも用ひ、影の長きこと至るの意に解して冬至にも用ひらるゝこと、第一冊に註したるが如くなれども、今の此文は冬至の意に用ひたるなり。○邾城、地名、今の湖北省黃岡縣の西北十里に在り。戰國の時、楚、邾人を此に遷せり、故に此名有り。○王澤弘、字號閲歷未だ檢出せず。

前編蘭竹梅菊四種。皆屬書本裝釘。以兩頁合而成圖。耐於飜閲。未免交縫處與筆墨有間斷。茲花卉二譜。頁粘成冊。不獨圖中蟲鳥無損全形。抑且案上展披。同乎冊頁。其中摹倣渲染。傳之梨棗。不失精微。非大費苦心。何以臻此。至畫中題詠。盡採古人。如有未合。始裁新句。即題咏中諸體字法。徧乞名流。鐫印諸工。必謀善手。此冊公之賞玩。自不宜作刻本觀。更不宜僅作畫譜觀也。

【譯】 前編の蘭竹梅菊の四種は、皆、書本の裝釘に屬し、兩頁を以て合して圖を成す。翻閲に耐ふるも、未だ交縫の處と筆墨と間斷有るを免れず。茲に花卉の二譜は、頁粘して冊を成す。獨り圖中の蟲鳥の、全形を損する無きのみならず、抑も且つ案上に展披すれば、冊頁に同じ。其中、摹倣渲染して、之を梨棗に傳へ、精微を失はざるは、大に苦心を費すに非ずんば、何を以て此に臻らん。畫中の題咏に至りては、盡く古人を採る。如し未だ合はざる有れば、始めて新句を裁す。即ち題咏中の諸體の字法は、徧く名流に乞ひ、鐫印の諸工は、必ず善手に謀る。此冊、之を賞玩に公にす。自ら宜しく刻本の觀を作すべからず、更に宜しく僅に畫譜の觀を作すべからざるなり。

【註】 兩頁、前後の二枚をいふ。○交縫處、前後二枚の合はせ目の處。○頁粘、前後の紙を貼り付けること。○展披、ひらき見るなり。○冊頁、畫帖。○梨棗、版木。○裁新句、新しき句を作る。

艸蟲花卉譜序

前人畫花卉未分艸與木即譜衆花亦惟編月令未嘗區別及之考之芍藥荷華之名已見于鄭風牡丹後出而曰木芍藥荷華註爲芙蕖後世稱爲芙蓉轉以拒霜花爲木芙蓉則二花之艸本居先而後之牡丹芙蓉始加木花以別之芥子園譜畫以艸花先乎木花者良有以也艸花宜綴艸蟲須得其飛翻鳴躍之狀非惟畫也即詩人之比興亦留意焉試觀三百篇所載艸木鳥獸各得其情如昆蟲之細微斯螽莎雞阜螽艸蟲蠅蜩之類曰動股曰振羽曰趨趨曰喓喓並營營嘒嘒各得其飛翻鳴躍之狀畫綴于花艸中使其枝墜欲搖翅揚欲動如香可采若股有聲豈可忽乎哉茲譜立意由小而大由簡而繁故于蘭竹梅菊之後而譜衆花衆花先艸本而後木本先艸蟲而後翎毛蓋欲學者如學詩之琢字鍊句由近體以及古風直可上

求三百篇之遺意矣。

辛巳九月望前三日。繡水王著書于瞰浙樓。

【譯】 前人、花卉を畫くに、未だ艸と木とを分たず。卽ち衆花を譜するも、亦惟だ月令を編し、未だ嘗て區別することを此に及ばず。之を考ふるに芍藥・荷華の名は、已に鄭風に見ゆ。牡丹は後に出でて、木芍藥と曰ふ。荷華は註して芙蕖と爲し、後世、稱して芙蓉と曰ひ、轉じて拒霜花を以て木芙蓉と爲す。則ち二花の艸本、先に居り、而して後の牡丹・芙蓉は、始めて木の字を加へて以て之を別つ。芥子園、畫を譜するに、艸花を以て木花に先んずるは、良に以有るなり。艸花には宜しく艸蟲を綴るべく、須く其飛翻鳴躍の狀を得べし。惟だ畫のみに非ざるなり。卽ち詩人の比興も亦、意をこゝに留む。試に三百篇の載する所の艸木鳥獸を觀るに、各〻其情を得たり。昆蟲の細微なる、斯螽・莎雞・阜螽・艸蟲・蠅・蜩の類に、股を動かすと曰ひ、羽を振ふと曰ひ、趨趨と曰ひ、喓喓並に營營・嘒嘒と曰へるが如き、各〻其飛翻鳴躍の狀を得たり。畫、花艸の中に綴り、其れをして枝墜つれば搖かんと欲し翅揚れば動かんと欲し、香の采る可きが如く、股に聲有るが若くならしむるは、豈に忽せにす可けんや。玆の譜、意を立つる、「小に由りて大に、簡に由りて繁なり。故に蘭竹梅菊の後に于てして、衆花を譜し、衆花は艸本を先にして木本を後にし、艸蟲を先にして翎毛を後にす。蓋し學者が、詩の琢字鍊句を學び、近體に由りて以て古風に及び、直に上三百篇の遺意を求む可きが如くならんことを欲するなり。辛巳の九月望前三日、繡水の王著、瞰浙樓に書す。

【註】 月令、年中行事を月月の氣候に配して規定したるもの。○芍藥荷華、詩經鄭風の溱洧篇に、贈之以芍藥」とあり。山有扶蘇篇に、隰有荷華」とあり、毛傳に、荷華は扶渠なり、とあり。○拒霜花、今日言ふところの芙蓉なり。○比興、本文に註す。○三百篇、詩經の詩は三百五篇有り。○斯螽、莎雞、阜螽、艸蟲、蠅、蜩、詩經豳風七月篇に、五月斯螽動股、六月莎雞振羽、とあり、召南草蟲篇に、趨趨阜螽とあり、又、喓喓草蟲とあり、小雅青蠅篇に、營營青蠅とあり、小雅小弁篇に、鳴蜩嘒嘒とあり。○琢字鍊句、詩の字句を琢磨鍛鍊すること。○近體、五言七言の律詩・絶句を近體詩といふ。○古風、古體詩をいふ。又、古詩とも稱す。五言古詩、七言古詩、三言詩、四言詩、六言詩等有り。

芥子園畫傳第十冊草蟲花卉譜上冊目錄

畫花卉淺說

畫法源流 草本花卉……一七
黃徐體異論……二一
畫花卉四種法……二五
花卉布置點綴得勢總論……二九
畫枝法……三二
畫花法……三六
畫葉法……四〇
畫蒂法……四三
畫心法……四五
畫花卉總訣……四七

畫草蟲淺說

畫法源流 草蟲……四八
畫草蟲法……五四
畫草蟲訣……五六
畫蛺蝶訣……五八
畫螳螂訣……五九
畫百蟲訣……六一
畫魚訣……六二

草本四瓣五瓣花頭起手式 五則

虞美人……六四

秋海棠……六四
金鳳……六四
秋葵……六五
水仙……六五

五瓣六瓣長蒂花頭式 五則
百合……六六
山丹……六六
萱花……六六
玉簪……六七
剪羅……六七

缺亞多瓣大花頭式 四則
芍藥……六八
蜀葵……六八
鶯粟……六九
芙蓉……六九

尖圓大瓣蓮花式 四則
側面蓮……七〇
菡萏……七〇
正面蓮……七一
將放菡萏……七一

各種異形花頭式 八則
僧鞋菊……七二
蝴蝶花……七二
牽牛花……七二
石竹花……七二
魚兒牡丹……七三

金盞花……七三
西蕃菊……七三
翠娥眉……七三

草本各花尖葉起手式 四則
山丹……七四
百合……七四
雞冠……七五
金鳳……七五

團葉式 三則
蜀葵……七六
秋海棠……七七
玉簪……七七

岐葉式 三則
秋葵……七八
芙蓉……七九
僧鞋菊……七九

長葉式 三則
萱草……八〇
蝴蝶花……八〇
水仙……八一

亞葉式 三則
芍藥……八一
鶯粟……八二
美人……八二

圓葉式 四則

反面正掩荷葉……八四
將放荷葉……八四
正面捲荷……八五
未放荷葉……八五

草本各花梗起手式 九則

二枝交加……八六
三枝倒垂……八七
三枝穿插……八七
下垂枝……八八
上仰枝……八八
三根穿插……八九
三枝交加……八九
芍藥根枝……九〇
紅蓼枝節……九一

根下點綴苔草式 十三則

遮根茂草……九一
霜後衰草……九一
枯草根……九一
初生嫩草……九三
爬根細草……九三
尖點苔草……九四
圓點苔草……九四
承露苔草……九四
根下野蕎……九四
攢三聚五苔……九五
下垂細草……九五

上仰細草……九五
根下蒲公英……九五

草蟲點綴式一 蛺蝶 六則

側面平飛……九六
正面……九六
反面……九六
折翅下飛……九七
側面……九七
歇花……九七

草蟲點綴式二 蜂 蛾 蟬 六則

採花蜂……九八
青蜂……九八
細腰蜂……九八
鐵蜂……九八
飛蛾……九九
雙蛾……九九
正面墜枝蟬……九九
反面抱枝蟬……九九

草蟲點綴式三 蜻蜓 豆娘 螽斯 蚱蜢 蟋蟀 飛蜓 八則

正飛蜻蜓……一〇〇
側飛蜻蜓……一〇〇
飛蜓……一〇〇
蟋蟀……一〇〇
豆娘……一〇一
螽斯……一〇一
下飛蚱蜢……一〇一

草上蚱蜢……一〇一
草蟲點綴式四　蝻蚱　絡緯　螳螂　牽牛　七則
蝻蚱……一〇一
叫蝻蚱……一〇一
絡緯……一〇一
螳螂……一〇二
擺蟲螳螂……一〇二
牽牛……一〇二
下行牽牛……一〇二

青在堂畫花卉草蟲淺說

畫法源流　草本花卉

天地間衆卉爭芳。爲人所娛心悅目者。不一而足。大約衆卉中。木花以富麗勝。草花以嫵媚勝。富麗則譜爲王者。嫵媚則比之美人。故草花之嫵媚。尤足娛心悅目。茲特各爲一冊。繪圖問世。以草卉先焉。然于草卉中。畹蘭籬菊。品類既多。幽芳特甚。亦先各崇一冊矣。此外凡春色秋容。莫不悉備。卽靈苗幽草。水葉汀花。各經寫肖。以及昆蟲飛躍。更復圖形。考諸繪事。代有傳人。但唐宋以來。善寫花之名手。未有草木區別。且既工花卉。自善翎毛。譜其源流。何能分晰。已詳見于後冊木本翎毛中。此不過畧舉其大畧云爾。名手始稱于錫。梁廣。郭乾暉。滕昌祐。盛於黃筌父子。至徐熙。趙昌。易元吉。吳元瑜出。其後各有師承。元之錢舜舉。王淵。陳仲仁。明之林良。呂紀。邊文進。皆名重一代。若取法。當以徐熙。黃筌爲正。而徐熙。黃筌之體製不同。因附黃徐體異論于後。

【譯】 天地の間、衆卉、芳を爭ひ、人の心を娛ましめ目を悅ばす所と爲る者、一にして足らず。大約、衆卉の中、木花は富麗を以て勝り、草花は嫵媚を以て勝る。富麗なるは則ち譜して王者と爲し、嫵媚なるは則ち之を美人に比す。故に草花の嫵媚なる、尤も心を娛ましめ目を悅ばすに足る。玆に特に各〻一冊と爲し、繪圖して世に問ひ、草花を以て先にす。然れども草卉の中に于て、畹蘭離菊は、品類既に多く、幽芳特に甚だしく、亦先に各〻一冊を崇らにす。此外、凡そ春色秋容、悉く備はらざる莫し。卽ち靈苗幽草、水葉汀花、各〻寫背を經、以て昆蟲の飛躍するに及ぶまで、更に復た形を圖す。諸の繪事を考ふるに、代〻傳ふる人有り。但だ唐宋以來、善く花を寫すの名手、未だ草木の區別有らず。且つ既に花卉に工なれば、自ら翎毛を善くす。其源流を譜するに、何ぞ能く分晰せん。已に詳かに後冊の木本翎毛の中に見ゆ。此には略ぼ其大略を擧ぐるに過ぎずと爾云ふ。名手は始め于錫・梁廣・郭乾暉・滕昌祐を稱し、黃筌父子に盛なり。徐熙・趙昌・易元吉・吳元瑜出づるに至りて、其後各〻師承有り。元の錢舜舉・王淵・陳仲仁・明の林良・呂紀・邊文進は、皆、名、一代に重し。若し法を取らば、當に徐熙・黃筌を以て正と爲すべし。而して徐熙・黃筌の體製は同じからず。因つて黃徐の體異なる論を後に附く。

【註】 衆卉、卉は草の總名。又、草木の總名。○富麗、ゆたかにうるはしきこと。○嫵媚、なまめかしきこと。○畹蘭、楚辭に、余既に蘭の九畹を滋う、とあるに本づく。○離菊、陶淵明の詩に、採二菊東籬下一とあるに本づく。○幽芳、おくゆかしきかをり。○崇、專と同じ。○春色秋容、春のうつくしき色彩と秋のうつくしき容姿の意にて、こゝにては春の花と秋の花とをいふ。○寫背、寫生すること。○翎毛、鳥のはね。鳥をいふ。○郭乾暉、南唐の營丘の人、世呼んで郭將軍と爲す。雜禽墨木、格律老勁にして、曲に物の性を盡す。○易元吉、字は慶之、宋の長沙の人。治平中、詔して壁に畫かしむ。妙に臻る。花鳥蜂蟬、動もすれば精奧に臻る。時に謂ふ、徐熙の後一人のみと。款は每に自ら長沙助敎易元吉畫と書す。嘗て荊湖の間に游び、奇を搜り古を訪ひ、輒ち意を留め、幾ど猿鹿と同じく遊ぶ。故に心傳目擊の妙、悉く毫端に著はれ、世俗の其藩を窺ふを得る所に非ざるなり。○吳元瑜、字は公品、宋の開封の人、官武功大夫・合州團練使たり。花鳥人物山林を善くす。崔白を學ぶ。白描纖細、傅染鮮潤にして、能く俗を變じて家を成し、兼ねて傳神を善くし、院體の外に出づ。○王淵、字は若水、濟軒と號す。元の錢塘の人。幼にして丹青を習ひ、趙文敏多く之を指敎す。故に畫く所、皆、古人を師とし、一筆の院體無し。山水は郭熙を師とし、花鳥は黃筌を師とし、人物は唐人を師とし、一一精妙なり。尤も墨花鳥竹石に精しく、當代の絕藝なり。天機逸發し、古に肖たれども古に泥まずと稱せらる。○陳仲仁、元の江右の人、官、陽城主簿に至る。山水人物花鳥を善くす。嘗て趙文敏と、畫法を論ず。文敏、及ばざる所多し。後、其寫生花鳥を見て、歎じて曰く、黃筌復た生ると雖も、亦復た爾爾たりと。其の重んぜらること此の如し。○林良、字は以善、明の廣東の人。鷹を以て錦衣衛百戶と爲り、內廷に供奉す。水墨の花卉翎毛樹木を善くし、遒勁なること草書の如し。著色も亦善し。○呂紀、字は廷振、明の鄞の人。宏治の間、仁智殿に供奉し、錦衣指揮使と爲る。翎毛に工に、間ま山水人物を作る。設色鮮麗、生氣奕奕たり。時に極めて貴重せらる。詔に應じ制を承けて、多く意を立て規を進む。孝宗嘗て之を稱して曰く。工、藝事を執りて以て諫む。○呂紀、之れ有りと。○邊文進、字は景昭、明の沙縣の人。永樂の間、召されて京師に至り、武英殿待詔を

授けらる。宣德の間に至りて、仍つて內廷に供事す。花卉翎毛を善くし、呂紀と名を齊しくす。人と爲り爽曠灑落、且つ博學にして詩を善くす。

【解】 天地の間に、人の心を娛ませ目を悅ばせる、美くしい草木の花は、數多く有るが、大體、多くの草木の花の中で、木の花は、ゆたかなる麗はしさを以て勝つて居り、草の花は、しなやかなるなまめかしさを以て勝つて居る。ゆたかなる麗はしき者は、花の中の王者として排列し、しなやかになまめかしき者は美人に比較する。それ故に草の花のしなやかになまめかしきは、尤も心を娛しませ目を悅ばせる。そこで特に草の花と木の花とを各く一冊として、繪圖を畫いて世に公にするに就いて、草花を先にするのである。然し草花の中に於て、蘭と菊とは、種類も多く、奥ゆかしきかをりの特に勝れたものであるので、先に各〻一冊づつをて當ておいた。此外、有らゆる春の花も秋の花も、悉く備はつて居り、卽ち深山幽谷に生ずる草木、水の中や水の邊に咲く草花も、それ〴〵寫生してあり、飛びはねる昆蟲に至るまで、形を寫してある。これまでの繪畫の事を考へるに、代々、傳へて居る人は有つたが、但し唐宋以來、善く花を寫す名人は、まだ草と木との區別は無く、いづれも善く畫いた。且つ花卉に工であれば、自然に翎毛にも巧であつた。其源流の系統を立てようとしても、分明に區別することは出來ない。此事は詳かに後冊(卽ち第十二冊)の木本翎毛の中に載せてあるので、ここには唯だ大略を擧げるに過ぎないのである。始め于錫・梁廣・郭乾暉・滕昌祐が名手と稱せられて居り、黃筌父子に至つて盛になり、徐熙・趙昌・易元吉・吳元瑜が出づるに及んで、其後、各〻之を師として學ぶ繼承者があり、元の錢舜舉・王淵・陳仲仁、明の林良・呂紀・邊文進等は、皆、一代に重んぜられて居た。若し古人を法として學ばうとするならば、徐熙と黃筌とを以て正道とすべきである。然し徐熙と黃筌との體製は同じくない。因つて黃徐體異なる論を後に附載する。

黃徐體異論

黃筌・徐熙之妙于繪事・學繼前人・法傳後世・如字中之有鍾王・文中之有韓柳也。然其並傳今古・各有不同。郭思論其體異云・黃筌富貴・徐熙野逸・不惟各言其志・蓋亦耳目所習・得之於手・而應於心者・何以明其然・黃筌與其子居寀・始並事蜀爲待詔・筌後累遷副使・後歸宋代・領眞命爲宮贊・居寀復以待詔錄

之。皆給事禁中。故習寫禁籞所見奇花怪石居多。徐熙江南處士。志節高邁。放達不羈。多狀江湖所有汀花野卉取勝。二人如春蘭秋菊。各擅重名。下筆成珍。揮毫可範。爲法雖異。傳名則同。至若筌之後有居寀。居寶。熙之孫有崇嗣。崇矩。俱能繼其家法。竝冠古今。尤爲難能也。

【譯】黄筌・徐熙の、繪事に妙に、學、前人を繼ぎ、法、後世に傳はること、宇中の、鍾王有り、文中の、韓柳有るが如きなり。然れども其の竝に今古に傳はること、各〻同じからざる有り。郭思、其の體異なるを論じて云ふ、『黄筌は富貴にして、徐熙は野逸なりとは、惟だ各〻其志を言ふのみなず、蓋し亦、耳目の習ふ所、之を心に得て、手に應ずる者なり。何を以て其の然るを明かにする。黄筌は、其子居寀と與に、始め竝に蜀に事へて待詔と爲る。筌は後に副使に累遷す。後、宋代に歸し、眞命を領して宮贊と爲る。居寀は復た待詔を以て之を錄す。皆、禁中に給事す。故に習ひて禁籞の見る所の奇花怪石を寫すこと多きに居る。徐熙は江南の處士にして、志節高邁、放達不羈なり。多く江湖の有る所の汀花野卉を狀して勝を取る。二人は春蘭・秋菊の如く、各〻重名を擅にし、筆を下せば珍と成り、毫を揮へば範とす可し。法たること異なりと雖も、名を傳ふることは則ち同じ。筌の後に居寀・居寶有り、熙の孫に崇嗣・崇矩有り、俱に能く其家法を嗣ぎ、竝に古今に冠たるが若きに至りては、尤も能くし難しと爲すなり』と。

【註】鍾王、魏の鍾繇と晉の王羲之。竝に支那第一の能書家なり。鍾繇は、三國の魏の潁川の人、字は元常、太傅に累官す。胡曬と並に劉德章の草書を師とす。繇の書は飛鴻、海に戲れ、舞鶴、天に游ぶが若く、世、胡肥鍾瘦と傳ふ。○韓柳、韓退之と柳子厚。並に唐代第一の文章家なり。○郭思論其體異云、此論は其著圖畫見聞志に出でたる者にして、こゝには其大要を抄錄したるなり。其全文に曰く、『該に云ふ、「黄家は富貴にして、徐熙は野逸なり」と。惟だ各〻其志を言ふのみならず、蓋し亦、耳目の習ふ所、之を手に得て、之を心に應ずるなり。何を以て其の然るを明かにする。黄筌は、其子居寀と、始め並に蜀に事へて待詔と爲る。筌は後に如京副使(官名)に累遷す。既に朝に歸し、筌は眞命を領して宮贊と爲り、居寀は復た待詔を以て之を錄す。皆、禁中に給事し、多く禁籞の有る所の珍禽瑞鳥奇花怪石を寫す。今、世に傳はる桃花鷹鷂・純白雉兎・金盆鶉鴿・孔雀・鸕鷀の類是れなり。又、翎毛の骨氣、豐滿を尙び、而して天水、色を分つ。徐熙は江南の處士にして、志節高邁、放達不羈なり。多く江湖の有る所の汀花野竹・水鳥淵魚を狀す。今、世に傳はる鳧雁・蘆葦・蒲藻・蝦魚・蓼艷・折枝・園蔬・藥苗の類是れなり。又、翎毛の形骨、輕秀を貴び、而して天水、色を通ず。二つの者は、春蘭秋菊、各〻重名を擅にし、筆を下せば珍と成り、毫を揮へば範とす可し。復た居寀の兄居寶有り。徐熙の孫は、崇嗣と曰ひ、崇矩と曰ふ。蜀に刁處士(名は光胤)・劉贊・滕昌祐・夏侯延祐・李懷袞有り。江南に唐希雅・希雅の孫曰く中祚・曰く宿・及び解處中の輩有り。都下に李符・李吉の儔有り。後來名手間出するに及びて、徐生と二黄とを跂望すること、猶ほ山水に三家有るがごとし』と。○野逸、山野に隱棲して、王公に事へず、世俗を超脱すること。○居寀、宋の黄居寀、字は伯鸞、筌の季子。蜀に仕へて翰林待詔と爲る。後、隨つて宋に歸し、光祿丞を授けらる。能く家學を繼ぎ、花竹翎毛を作り、天眞に默契し、物理に冥周し、怪石山景を寫すこと、

往往、父に過ぎたり。○領眞命、眞の朝廷卽ち宋朝の任命を受くるなり。後蜀を僞朝とするなり。○禁籞、天子の庭園。籞は竹を編みて作りたる庭園の籬なり。○處士、仕宦せざる士。○江湖、世間、民間の意。○徐崇矩、熙の孫。禽魚草蟲花鳥、家學を墜さず。士女を作りて益〻工に、曲眉豐臉なり。蓋し花蝶を寫すの餘思なり。

【解】 黃筌と徐熙とが繪畫の事に巧妙であつて、其學は前人を繼承し、其法は後世に傳はつて居ることは、ちやうど書に於ては鍾繇や王羲之が有り、文章に於ては韓愈や柳宗元が有るやうなものである。然し二人の製作はいづれも古に傳はり今に傳はつて居るが、各〻同じく無いところが有る。宋の郭思は、二人の體製の異なつて居ることを論じて云つた、『世人は、黃筌の畫には富貴の趣があり、徐熙の畫には野逸の趣がある、と曰つて居るが、これは各〻其の志すところを言ふだけでは無く、蓋し耳や目に習れたところが、手にあらはれて、心に相應じた者である。何を以て然うであることを知るかといへば、黃筌は其子居寀と與に、始めには後蜀に事へて待詔と爲り、筌は後に如京副使といふ官に昇進した。其後、筌は宋朝に仕へ、眞の朝廷の任命を受けて宮贊の官と爲り、居寀も復た待詔と爲り、共に宮中に給事した。故に多く宮中の庭園の中に於て見るところの珍らしい花や石を寫した。徐熙は江南の處士であつて、志節高くすぐれ、物事にかゝはらず氣ままにふるまひ、多く民間の水邊の花や原野の草を畫いた。二人は、蘭と菊との如く、各〻重き名聲が有り、筆を下せば世に珍重せられ、筆を揮へば後の手本とされる。その法は異なつて居るけれども、名聲の後世に傳はることとは同じい。筌の子には居寀と居實とが有り、熙の孫には崇嗣と崇矩とが有り、俱に能く其家法を繼承し、いづれも古今に傑出して居ることは、尤も人の及び難いところである』と。

畫花卉四種法

畫花卉之法。爲類有四。一則鈎勒著色法。其法工于徐熙。畫花者。多以色暈而成。熙獨落墨寫其枝葉蕊蕚。然後傳色。骨格風神竝勝者是也。一則不鈎外匡。只用顏色點染法。其法始于滕昌祐。隨意傳色。頗有生意。其爲蝶蟬。謂之點畫者是也。其後則有徐崇嗣。不用描寫。止以丹粉點染而成。號沒骨畫。劉常染色。不以丹粉襯傳。調勻顏色。深淺一染而就。一則不用顏色。只以墨筆點染法。其法始于殷仲容。花卉極得其眞。或用墨點。如兼五色者是也。後之鍾隱。獨以墨

分向背。丘慶餘寫草蟲。獨以墨之深淺映發。亦極形似之妙矣。一則不用墨著。只以白描法。其法始于陳常。以飛白筆作花本。僧布白。趙孟堅。始用雙鈎白描者是也。

【解】花卉を畫くの法、類たること四有り。一は則ち鈎勒著色の法なり。其法は徐熙に工なり。花を畫く者は多くは色を以て暈して成る。熙獨り墨を落して其枝葉蕊蕚を寫して、然る後に色を傳け、骨格風神竝に勝れたる者是れなり。一は則ち外匡を鈎せず、只だ顏色を以て點染する法なり。其法は滕昌祐に始まり、意に隨つて色を傳け、頗る生意有り、其の蟬蝶を爲る、之を點畫と謂ふ者是れなり。其後には則ち徐崇嗣有り、描寫を用ひず、止だ丹粉を以て點染して成り、沒骨畫と號す。劉常は色を染むるに、丹粉を以て襯傅せず、顏色を調勻し、深淺一染して就る。一は則ち顏色を用ひず、只だ墨筆を以て點染する法なり。其法は殷仲容に始まり、花卉極めて其眞を得、或は墨を用ひて點じ、五色を兼ねるが如き者是れなり。後の鍾隱は獨り墨を以て向背を分ち、丘慶餘は草蟲を寫すに、獨り墨の深淺を以て映發し、亦、形似の妙を極む。一は則ち墨を用ひて著けず、只だ白描を以てする法なり。其法は陳常に始まり、飛白の筆を以て花本を作る。僧布白・趙孟堅始めて雙鈎白描を用ふる者是れなり。

【註】不鈎外匡、輪廓を描かざるなり。○沒骨畫、線を用ひずして描きたる畫をいふ。○劉常、宋の金陵の人。花木の名、江左に重く、氣格清秀にして、生意有り、趙昌・王友の上に在り。○深淺、濃淡なり。○殷仲容、唐の人、聞禮の子。則天の時、秘書丞・申州刺史に任ぜられ、冬官郎中に終る。寫貌に工に、及び人物花鳥、妙、其眞を得たり。或は水墨を用ひ、五采を兼ねるが如し。篆隷を善くし、題署尤も精し。○鍾隱、字は晦叔、南唐の天台の人、亦、一時の名流なり。郭乾暉が其術を祕して以て人に授けざるを知り、隱、姓名を變じて其家に至り、其家に寓食し、甘んじて服役に從ひ、其畫を伺ひて心に之を得たり。一日、興に乘じて鶴を壁に作る。乾暉、之を知り、遂に善く之を遇す。是れに因りて譽を馳す。好んで禽鳥花竹榛棘を作りて自ら娛む。能く水墨を以て向背を分つ。兼ねて山水人物を作る。筆を擧げ像を寫せば、必ず精絕を致す。少くして穎悟、俗事に嬰れず、好んで肥遯自ら處り、畫を以て名を海內に馳す。○陳常、宋の江南の人。飛白の筆を以て樹石を作り、清逸の意有り。折枝花、逸筆を以て花頭を亂點し、妙、造化を奪ふ。○飛白筆、飛白は、もと書體の一種。筆畫枯槁して中空しき者。卽ち筆蹟のかすれたる者なり。後漢の蔡邕の作る所なり。靈帝の時、邕に詔して聖皇篇を作らしめて成る。鴻都門に至る。時に方に脩飾す。役人が聖帝を以て字を成すを見、因つて歸りて飛白の書を作る。漢魏の宮闕、多く其體を用ふ。飛白の二字は、本書中、しば〳〵用ひられ、時としては鈎勒の意味にさへも用ひられたれども、今此處には、本義を以て用ひらるゝなり。○僧布白、恐らくは希白の誤ならん。希白は南宋の人、善く荷花を白描す。

【解】花卉を畫くの法は、分類すれば四種有る。其一つは鈎勒著色の法である。其法は徐熙に至つて巧妙であつた。花を畫く者は、多くは色を以て暈して出來たが、徐熙

は墨を以て枝や葉や蕊や蕚を寫して、然る後に彩色を施し、骨格も風神も共に勝れてゐたのが、是れである。其一つは輪廓を描かず、只だ顔色を用ひて點染する法である。其法は滕昌祐に始まつたのであり、隨意に彩色を施し、頗る生き〳〵とした意氣があつた。彼が蟬や蝶を畫いたのは、これを點畫と謂つて居る。それが是れである。其後に、徐崇嗣が出て、描寫することをせず、只だ丹粉（朱と胡粉、卽ち繪具）を以て點染して作つた。これを沒骨畫と稱する。劉常は彩色するに、丹粉を以て襯傅をせず、顔色を調合して、濃淡を一染で仕上げた。其一つは、顔色を用ひず、只だ水墨を以て點染する法である。其法は殷仲容に始まつたのであり、花卉は極めて其眞に逼り、或は墨を用ひて點しただけで、五色を兼ね備へて居るやうであつた。それが是れである。後に鍾隱は、ただ墨のみを以て向背を書き分け、丘慶餘は、草蟲を寫すに、ただ墨の濃淡のみを以て寫し出して、形似の妙を極めた。其一つは、墨の濃淡をも用ひず、ただ白描する法である。其法は陳常に始まつた。陳常は飛白の筆法を以て花の枝を畫いた。僧布白・趙孟堅は始めて雙鈎を用ひて白描した。それが是れである。

花卉布置點綴得勢總說

畫花卉。全以得勢爲主。枝得勢。雖縈紆高下。氣脉仍是貫串。花得勢。雖參差向背不同。而各自條暢。不去常理。葉得勢。雖疎密交錯。而不繁亂。何則以其理然也。而著色象其形采。渲染得其神氣。又在乎理勢之中。至于點綴蜂蝶草蟲。尋豔採香。緣枝墜葉。全在想其形勢之可安。或宜隱藏。或宜顯露。則在乎各得其宜。不似贅瘤。則全勢得矣。至于葉分濃淡。要與花相掩映。花分向背。要與枝相連絡。枝分偃仰。要與根相應接。若全圖章法。不用意構思。一味塡塞。是老僧補衲手段。焉能得其神妙哉。故所貴者取勢。合而觀之。則一氣呵成。深加細玩。又復神理湊合。乃爲高手。然取勢之法。又甚活潑。未可拘勢。必須上求古法。古法未盡。則求之花木眞形。其眞形更宜於臨風承露帶雨迎曦時觀之。更姿態橫生。愈於嘗格矣。

【譯】花卉を畫くには、全く勢を得るを以て主と爲す。枝、勢を得れば、縈紆高下すと雖も、氣脉仍ほ是れ貫串す。花、勢を得れば、參差向背同じからずと雖も、各自條暢し、常理を去らず。葉、勢を得れば、疎密交

錯すと雖も、繁亂せず。何となれば則ち其理然るを以てなり。而して著色して其形采を象り、渲染して其神氣を得るは、又、理勢の中に在り。蜂蝶草蟲を點綴するに至りては、豔を尋ね香を採り、枝に緣り葉に墜つると、全く其形勢の安んず可きを想ふに在り。或は隱藏するに宜しく、或は顯露するに宜しきは、則ち各〻其の宜しきを得るに在り。贅瘤に似ざれば、則ち全勢得たり。葉に濃淡を分つに至りては、花と相掩映せんことを要す。花に向背を分つには、枝と相連絡せんことを要す。枝に偃仰を分つには、根と相應接せんことを要す。若し全圖の章法、意を用ひ思を構へず、一味に塡塞せば、是れ老僧が衲を補ふ手段なり。焉んぞ能く其神妙を得んや。故に貴ぶ所の者は勢を取るなり。合はせて之を觀れば、則ち一氣呵成にして、深く細玩を加ふれば、又復た神理湊合するは、乃ち高手と爲す。然れども勢を取るの法は、又甚だ活潑にして、未だ拘執す可からず。必ず須く上、古法を求むべし。古法未だ盡きざれば、則ち之を花木の眞形に求む。其眞形は更に宜しく風に臨み露を承け雨を帶び曦を迎ふる時に於て之を觀るべし。更に委態横生して、雷格に愈らん。

【註】 紫紆、めぐりまとふ。入り亂れたること。○貫串、貫穿と同じ。つらぬきうがつ。○參差、長短高低あること。○條暢、のびやかなること。○點綴、程善く書き入れること。○尋豔、花を尋ぬるなり。○贅瘤、こぶ。○全圖章法、畫面全體の構圖卽ち布置なり。○一氣呵成、一いきに書き上げること。○湊合、あつまり合ふ。○拘執、拘泥すること。○雷格、常格に同じ。

【解】 花卉を畫くには、勢を得ることが最も主要である。枝に勢を得るときは、入り亂れもつれ合つて高くなつたり低くなつたりしても、氣脉はやはり貫通して居る。花に勢を得るときは、高い者も有り低い者もあり正面の者もあり背面の者も有つても、各〻のびやかに暢びて、常理に叶つて居る。葉に勢を得るときは、或は疎であつたり或は込み合つたりしていろ〳〵入り交つて居ても、繁雜になつて紛亂しない。それは常理に叶つて居るからである。そして著色して其形狀色采を寫し出し、渲染して其精神意氣を顯はし得るのも、常理と形勢との中に在るのである。蜂や蝶や草蟲を花卉の中に書き入れるに就いては、それ等が花を尋ね香を採り、枝に緣り葉の上に墜ちて居るなど、其形勢の落ちつくべき處を考へて書き入れるべきである。或は隱れて居るが宜しいか、或は顯はれて居るが宜しいかなどは、それ〴〵宜しきを得るやうにすべきである。若しそれが餘計な瘤のやうな邪魔物にならなければ、全體の形勢がうまく出來たのである。葉に濃淡を分けるには、花と善く釣り合ふやうにすることを要する。花に向背を分けるには、枝と善く連絡することを要する。枝に下向き上向きを分けるには、根と善く連絡することを要する。若し全畫面の構圖に、工夫を凝らさず、むやみに書きなぐるならば、それは老僧が衣の破を縫ふやうな仕方である。神妙なる製作

は得られないのである。それ故に勢を取ることが最も大切である。總體から見ると、一いきに出來上つたやうであるか、深く玩味すると、精神條理が集まり合してゐるのが、名手である。けれども勢を得る法は、又甚だ活潑であつて、變化窮り無いものであつて、一概に拘泥してはならぬ。必ず古人の法を求めることを要する。古人の法に於て未だ盡さないところは、花木の實物の形に求める。其實物の形は、更に風に吹かれたり露に濕ほふたり雨に濕れたり朝日を迎へたりする時に於て之を觀るが宜しい。さうすると、更に容恣形態に於て自在を得て、通常の格法を超越することが出來るであらう。

畫枝法

凡畫花卉。不論工緻寫意。落筆時如布棋法。俱以得勢爲先。有一種生動氣象。方不死板。而取勢必先得之枝梗。有木本草本之殊。木本宜蒼老。草本宜纖秀。然于草木之纖秀中。其勢不過上插下垂橫倚三者。然三勢中。又有分岐交插回折三法。分岐須有高低向背勢。則不致乂字分頭。交插須有前後粗細勢。則不致十字交加。回折須有偃仰縱橫勢。則不致之字盤曲。又有入毛宜忌三法。上插宜有情。而忌直攉。下垂宜生動。而忌拖憊。橫折宜交搭。而忌平揸。畫枝之法若此。枝之于花。亦如人四肢之于面目也。若面目雖佳。而四體不備。豈得爲全人乎。

【譯】凡そ花卉を畫くには、工緻と寫意とを論ぜず、落筆の時、棋を布く法の如く、俱に勢を得るを以て先と爲す。一種の生動の氣象有り、方めて死板ならず。而して勢を取るには必ず先づ之を枝梗に得。木本と草本との殊なる有り。木本は宜しく蒼老なるべく、草本は宜しく纖秀なるべし。然して草木の纖秀なる中に于て、其勢、上插・下垂・横倚の三者に過ぎず。然して三勢の中に、又、分岐・交插・回折の三法有り。分岐には宜しく高低向背の勢有るべし。則ち乂字の分頭を致さず。交插には須く前後粗細の勢有るべし。則ち十字の交加を致さず。回折には須く偃仰縱横の勢有るべし。則ち之字の盤曲を致さず。又、入手の宜しく忌むべき三法有り。上插は宜しく情有るべく、而して直攉を忌む。下垂は宜しく生動すべく、而して拖憊を忌む。横折は宜しく交搭すべく、而して平揸を忌む。枝を畫くの法は此の若し。枝の花に于けるは、亦、人の四肢の面目に于けるが如きなり。若し面目は佳なりと雖も、四體備はらずんば、豈に全人と爲すを得んや。

【註】工緻、細工緻密の意にて、密畫をいふ。○布棋法、碁の布石法。○生動、生き〳〵として活動すること。○死板、筆づかひの活動せずして變化無きこと。○枝梗、梗は若き枝なり。○蒼老、古びて勁きこと。○纖秀、

細くてしなやかにすつきりとすること。○倚、横へ伸びたるなり。○分岐、枝が二またに分れたるなり。○上插、上へ伸びたるなり。○下垂、上から下へ垂れたるなり。○横回折、蔓草などの如くうねり〳〵て伸びたるなり。○交插、枝と枝とが前後左右より交叉するなり。○粗細、太きと細きとなり。○直擺、まつすぐに伸ぶるなり。○拖儻、力無くだらりと垂れたるなり。○交搭、枝と枝とが組み合ふこと。○平搆、左右へ一直線に伸びてつつかへ棒にて物を支へたるが如き形なるをいふ。○四肢、手と足とをいふ。○四體、四肢なり。

【解】　すべて花卉を畫くには、細密なる畫と寫意の畫とを問はず、筆を下す時に、碁の布石の法の如く、いづれも形勢の宜しきを得ることが第一である。一種の生き〳〵として活動する氣象が有つて、始めて死板と爲らぬのである。そして必ず先づ枝梗を畫くときに形勢の宜しきを得なければならぬ。枝梗を畫くには、木本と草本との相違がある。木本は古びて勁いが宜しく。草本は細くてしなやかなるが宜しい。然し草木(恐らくは草本の誤ならん)の細くしなやかなる中に於て、其形勢は、上插と下垂と横倚との三つに過ぎない。上插は枝が下から上へ向つて伸びるのであり、下垂は上から下に向つて垂れ下るのであり、横倚は横へ向つて伸びるのである。そして三つの形勢の中に、分岐と交插と回折との三つの法が有る。分岐は枝が二またに分れることであり、交插は枝と枝とが前後左右より交叉することであり、回折は枝がうねりくねりて伸びることである。分岐する枝には高いと低いと正向と背向との區別が有るべきである。さうすれば、乂の字の形の如く頭の分れることは無い。交挿する枝には、前と後と太いと細いとの區別が有るべきである。さうすれば、十の字の形の如く交叉することは無い。回折する枝には、上へ向いたり下へ向いたり縦になつたり横になつたりする趣があるべきである。さうすれば、之の字の形の如く曲りくねることは無い。又、初學者の忌むべきところの三つの法が有る。上插の枝には、風情が有るべきであり、眞直に上へ伸びることを忌む。下垂の枝は、生き〳〵とした趣が有るべきであり、力無くだらりと垂れさがることを忌む。横折の枝は、組み合ひ重なり合ふべきであり、左右へ一直線に伸びて支へ棒のやうになることを忌む。枝を畫く法は右の如くである。枝と花との關係は、ちやうど人の手足と容貌との關係のやうなものである。若し容貌は美しくても、手足が備はつてゐなければ、完全なる人とすることは出來ないのである。

畫花法

各種花頭。不論大小。宜分已開未開高低向背。卽叢集亦不雷同。不可直仰無嬌柔之態。不可低垂無翩翻之姿。不可比偶無參差之致。不可聯接無猗揚之勢。須偃仰得宜而顧盼生情。又須反正互見而映帶得趣。不獨一叢中。色宜深淺。卽一朶一瓣。必須內重外輕。方爲合法。同一花也。未放內瓣色深。已放外瓣色淡。同一本也。已殘者色褪。正放者色鮮。未放者色濃。凡一切色不可皆濃。必須間以淡色。間以淡色。愈顯濃處。光艶奪目。花之黃色。更宜輕淺。白色以粉傅者。以淡綠分染。不用粉。則以淡綠外染。則花之白色逼出矣。着色花頭。在絹上鈎匡。有傅粉。染粉。鈎粉。襯粉諸法。若紙上。別有蘸色點粉法。及用色點染法。皆須深淺得宜。自覺嬌艶。過于鈎勒。名爲無骨畫。更有全用水墨色具淺深。不施脂粉。頗饒風韻。前代文人寄興。往往善此。則又全在用筆之神矣。

【譯】 各種の花頭は、大小を論ぜず、宜しく已開・未開・高低・向背を分つべし。卽ち叢集するも亦雷同せず。直仰して嬌柔の態無かる可からず。低垂して翩翻の姿無かる可からず。比偶して參差の致無かる可からず。聯接して猗揚の勢無かる可からず。須く偃仰して宜しきを得て顧盼して情を生ずべし。又須く反正互に見はれて映帶して趣を得べし。獨り一叢の中に色宜しく深淺あるべきのみならず、卽ち一朶一瓣、必ず須く內重く外輕かるべし。方に合法と爲す。同一の花なるも、未だ放かざるは內瓣色深く、已に放けるは外瓣色淡し。同一の本なるも、已に殘せる者は色褪せ、正に放ける者は色鮮かに、未だ放かざる者は色濃し。凡そ一切の色、皆濃くす可からず。必ず須く間ふるに淡色を以てすべし。間ふるに淡色を以てすれば、愈〻濃處を顯はし、光艶、目を奪ふ。花の黃色は、更に宜しく輕淺にすべし。白色、粉を以て傳くる者は、淡綠を以て分染す。粉を用ひざれば、則ち淡綠を以て外染す。則ち花の白色逼出す。花頭に著色するには、絹上に在りて鈎匡し、傅粉・染粉・鈎粉・襯粉の諸法有り。若し紙上には、別に、蘸色點粉法及び用色點染法有り。皆須く深淺宜しきを得べし。自ら嬌艶なること鈎勒に過ぎたるを覺ゆ。名づけて無骨畫と爲す。更に、全く水墨を用ひて色淺深を具ふる有り、脂粉を施さず、頗る風韻饒し。前代の文人、興を寄する、往往此れを善くす。則ち又全く筆を用ふるの神なるに在り。

【註】 翩翩、ひるがへるさま。○比偶、相竝ぶこと。○猗揚、猗は依るなり。一は依りかゝり、一は高く揚るなり。此字の出典詳かならず、姑く上の如く解す。○已殘者、盛りを過ぎて色香のそこなはれ衰へたる者。○分染、わりくさ。外郭より內方に向つて隈を取ること。○外染、そとのくま。花の外圍を隈どること。○鈎匡、鈎勒すること。○傅粉染粉鈎粉襯粉。皆、胡粉の著色法にして、傅粉は胡粉にて地をつくること。染粉は胡粉の地の上にくさどりを施すこと。鈎粉は胡粉にて筋を入れること。襯粉は絹地の裏より胡粉を施すこと。第十

三冊設色諸法の中の傅粉の條を參照せよ。○蘸色點粉法用色點染法、蘸色點粉法は、沒骨畫を畫くに、繪具に胡粉を合はせ用ひる法なり。用色點染法は、胡粉を合はせず、單に繪具のみを用ひて彩色する法なり。○無骨畫、沒骨畫と同じ。○脂粉、繪具をいふ。

【解】 各種類の花は、大きいものでも小さいものでも、已に開いたのと、まだ開かないのと、高いのと低いのと、向と背とを書き分けるべきである。さうするときは、叢がり集まつた花でも、其形は一樣にならぬのである。眞直に上へ向いてゐて、なまめかしくしなやかな態が無いやうであつてはならぬ。だらりと低く垂れ下つてゐて、翩翻とひるがへる姿が無いやうであつてはならぬ。相並んで同じ高さになつてゐて、參差として高低不揃なる致が無いやうであつてはならぬ。相聯なり接してゐて、一は依りかゝり一は高く揚る勢が無いやうであつてはならぬ。偃いたり仰いだりして宜しきに叶ひ、此は彼を顧み彼は此を盼て風情が有るやうにすることを要する。又、反面のも有り正面のも有つて互に照り合うて趣が有るやうにすることを要する。ただ一叢の中に於て色に濃淡が無ければならぬだけでは無く、一本の枝、一枚の瓣にも、必ず內は濃く外は淡くしなければならぬ。さうして始めて合法とする。同じい花であつても、まだ開かないのは內瓣の色が濃く、已に開いたのは外瓣の色が淡い。同じい枝であつても、盛りの過ぎて衰へた者は色が褪せ、眞盛りに咲いて居る者は色が鮮かであり、まだ開かない者は色が濃い。凡そすべての色を、皆濃くしてはならぬ。必ず淡い色を雜へることを要する。淡い色を雜へるときは、ます〳〵濃い色がはつきりと現はれて、色艶が眩いばかりに美くしくなる。花の黃色なる者は、一層淡くするが宜しい。白い色に胡粉を用ひた者は、淡綠を以て外郭より內面に向つて隈を取る。胡粉を用ひない者は、淡綠を以て花の外圍をぼかす。さうすると、花の白い色がはつきりと引き立つやうになる。花に著色するには、絹本であれば鈎勒を施し、それには傅粉・染粉・鈎粉・襯粉等のいろ〳〵の法がある。若し紙であるときは、別に蘸色點粉法と用色點染法とが有る。皆、濃淡が宜しきに叶ふことを要する。さうすれば、鈎勒の者よりも勝つて嬌艶しい者が出來るのである。それを無骨畫と名づける。別に、水墨のみを用ひて濃淡の色を具備して居る者があり、脂粉を用ひずして、頗る風韻が多い。前代の文人が興に乘じて畫いた者には、往々此類の善い者が有る。それは全く筆を用ひることが巧妙なるに因るのである。

畫葉法

枝幹與花、已知取勢、而花枝之承接、全在乎葉、葉之勢、豈可忽哉。然花與枝之勢、宜使之欲動、花枝欲動、其勢在葉、嬌紅掩映、重綠交加、如婢擁夫人、夫人所之、婢必先起、夫紙上之花、何能使之搖動、惟以葉助其帶露迎風之勢、則花如飛燕、自飄飄欲飛矣、然葉之風露、無從繪出、須出以反葉折葉掩葉中、反葉者、衆葉皆正、此葉獨反、折葉者、衆葉皆直、此葉獨折、掩葉者、衆葉皆全、此葉獨掩、花之爲葉不一、有大小長短岐亞之分、大約葉細多者、宜間以反、一切藤花草卉葉是也、葉長者、宜間以折葉、蘭萱是也、葉岐亞者、宜間以掩葉、芍藥與菊是也、若以墨點、則正葉宜深、反葉宜淡、若用色染、則正葉宜青、反葉宜綠、荷葉反背、則宜綠中帶粉、惟秋海棠反葉宜紅、所言葉以風露取勢者、凡草本春榮秋萎之花皆然也、

【譯】 枝幹と花とは、已に勢を取るを知る。而して花枝の承接は、全く葉に在り。葉の勢は、豈に忽せにす可けんや。然して花と枝との勢は、宜しく之をして動かんと欲せしむべし。花枝の動かんと欲するは、其勢、葉に在り。嬌紅掩映し、重綠交加するは、婢の夫人を擁するが如し。夫人の之く所は、婢必ず先づ起つ。夫れ紙上の花は、何ぞ能く之をして搖動せしむる。惟だ葉を以て其の露を帶び風を迎ふるの勢を助くれば、則ち花は飛燕の如く、自ら飄飄として飛ばんと欲す。然れども葉の風露は、繪き出すに從無し。須く出すに反葉・折葉・掩葉の中を以てすべし。反葉は、衆葉皆正しきに、此葉獨り反す。折葉は、衆葉皆直きに、此葉獨り折る。掩葉は、衆葉皆全きに、此葉獨り掩ふ。花の葉たる一ならず、大小長短岐亞の分有り。大約、葉の細く多き者は、宜しく間ふるに反を以てすべし。一切の藤花草卉の葉是れなり。葉の長き者は、宜しく間ふるに折葉を以てすべし。蘭萱是れなり。葉の岐亞なる者は、宜しく間ふるに掩葉を以てすべし。芍藥と菊と是れなり。若し墨を以て點ずれば、則ち正葉は宜しく深かるべく、反葉は宜しく淡かるべし。若し色を用ひて染すれば、則ち正葉は宜しく青なるべく、反葉は宜しく綠なるべし。荷葉の反背は、則ち宜しく綠中に粉を帶ぶべし。惟だ秋海棠の反葉は宜しく紅なるべし。言ふ所の葉は風露を以て勢を取るとは、凡そ草本の春榮秋萎の花皆然るなり。

【註】 嬌紅、うつくしくなまめかしき紅色。花をいふ。○重綠、かさなりたる綠色。葉をいふ。○反葉、裏がへりたる葉。○掩葉、ねぢれて裏がへりたる葉。○岐亞、岐は分岐したる葉、たとへば黃蜀葵の葉の如きをいふ。亞は切れ込みありて亞字の如き形の葉、たとへば菊の葉の如きをいふ、○萱、萱草、わすれぐさ。○春榮秋萎、春に芽を出し榮えて秋に至つて萎み枯るゝなり。

【解】 枝幹と花とは、勢を取らねばならぬことをば、已に知つた。さうして、花と枝とは、全く葉によつて相連接するのである。されば葉の勢は輕忽にすることは出來な

いのである。花と枝との勢は、生動するやうにすべきである。花と枝とを生動するやうにするには、葉の書き方によつてそれが出來る。美しい紅なる花が照り合ひ、綠なる葉が幾重にも重なつて居るのは、たとへば侍女が夫人を取り巻いて居る如くである。夫人の往く所には、侍女が必ず先づ起つのである。紙の上に畫かれたる花は、如何して生き〳〵と動搖させることが出來るか。惟だ葉を以て花が或は露を帶び或は風を迎へて居る勢を助けるときは、花は燕の如く、自ら飄飄と飛ばうとするやうになる。然し葉の風や露は、それを畫き出すことは出來ない。それを出すには反葉・折葉・掩葉の中のいづれかを用ひる。反葉といふは、多くの葉が皆正面なのに、此葉のみ裏がへつて居るのである。折葉といふは、多くの葉が皆眞直なのに、此葉のみ折れて居るのである。掩葉といふは、多くの葉が皆完全なのに、此葉のみねぢれて裏がへつて居るのである。花の葉は一樣では無く、大きいもの・小さいもの・長いもの・短いもの・分岐したるもの・亞字形のもの等いろ〳〵の區別が有る。大體、葉の細くして多い者は、反葉を雜へるが宜しい。一切の藤の花・草卉の葉がそれである。葉の長い者は、折葉を雜へるが宜しい。蘭や萱草がそれである。葉の分岐したる者や亞字形の者は、掩葉を雜へるが宜しい。芍藥と菊とがそれである。若し墨を用ひて書くならば、正葉は濃いが宜しく、反葉は淡いが宜しい。若し彩色を施すならば、正葉は青を用ひるが宜しく、反葉は綠を用ひるが宜しい。荷葉の反背は綠の中に胡粉を雜へるが宜しい。葉は風や露を以て勢を取るといふのは、すべて草木の春榮え秋萎む花は、皆然うである。

畫蕚法

木本之枝。草本之莖。俱由蒂而生蕚。蕚包蕚。蕚吐瓣。蒂雖各有不同。然外包衆蕚。內承衆瓣。則一也。若大花如芍藥秋葵。蒂內有苞。秋葵內苞綠。外苞蒼。芍藥內苞綠。外苞紅。凡花正面則露心不露蒂。背面則隔枝露全蒂。而不露心。側面則露半蒂半心。秋海棠總苞分莖而無蒂。夜合萱花。以瓣根卽蒂。瓣多者蒂多。瓣五者蒂亦五。有有苞而無蒂者。有有蒂而無苞者。有苞蒂俱全者。此蒂之形色。聊舉大畧。衆種俱雜見分圖。更當于眞花著眼。自得其天然色相矣。

【譯】 木本の枝、草本の莖は、俱に蒂に由りて蕚を生じ、蕚、蕚を包み、蕚、瓣を吐く。蒂は各〻同じからざ

る有りと雖も、然れども外は衆蕚を包み、内は衆瓣を承くることは、則ち一なり。若し大花、芍藥・秋葵の如きは、蒂の内に苞有り。秋葵は、内苞は綠に、外苞は蒼し。芍藥は、内苞は綠に、外苞は紅なり。凡そ花の正面なるは則ち心を露はして蒂を露はさず。背面なるは則ち枝を隔てて全蒂を露はして、心を露はさず。側面なるは則ち半蒂半心を露はす。秋海棠は總苞に莖を分ちて蒂無し。夜合・萱花は、瓣根を以て卽ち蒂とす。瓣多きは蒂多し。瓣五なる者は蒂も亦五なり。苞有りて蒂無き者有り、蒂有りて苞無き者有り、苞蒂俱に全き者有り。此れ蒂の形色、聊か大略を擧ぐ。衆種俱に分圖に雜見す。更に當に眞花に于て眼を著くべし。自ら其天然の色相を得ん。

【註】蒂、蒂と同じ。花の枝莖と相連なる處をいふ。○蕚、花托なり。○秋葵、黃蜀葵、とろろ。○苞、花梗の下部の葉片なり。○夜合、百合の一種。合歡も一に夜合と稱すれども、こゝに夜合といへるは合歡にあらず。

【解】木本の枝や草木の莖は、いづれも蒂から蕚を生じ、蕚は蕚を包み、蕚から瓣が出て居る。蒂は草木の種類に因つて各〻違つて居るけれども、外は幾つかの蕚を包み内は幾つかの瓣を承けて居ることは同じい。芍藥や秋葵の如き大きい花は、蒂の内に苞が有る。秋葵は、内部の苞は綠であり、外部の苞は蒼い。芍藥は、内部の苞は綠であり、外部の苞は紅である。凡そ花の正面なる者は、心は露はれて居るが、蒂は露はれて居ない。背面なる者は、枝を隔てて蒂の全面が露はれて居るが、心は露はれてゐない。側面なる者は、蒂半分と心半分とが露はれて居る。秋海棠は、總苞から莖が出て居て、蒂は無い。夜合や萱草の花は、瓣の本を以て蒂として居る。瓣の多い者は蒂も多い。瓣が五つ有る者は蒂も五つ有る。苞は有るが蒂の無い者も有り、蒂は有るが苞の無い者も有り、苞も蒂も俱に備へて居る者も有る。ここには蒂の形と色とに就いて、大畧を擧げたのである。いろ〳〵の種類は俱に分圖の中に出して置いた。更にいろ〳〵の花の實物に就いて仔細に觀察すべきである。さうすると、其の天然の色と相とを自ら會得するであらう。

畫心法

草花之心。俱由蒂生。與木花不同。芍藥芙蓉。心雜於瓣根。蓮華心淡而蘂黃。夜合。山丹。萱花。玉簪花六瓣。鬚亦六莖有蕊。根中別挺生一根則無蕊。菊多種類。有有心。無心。其形色淺深多寡之不同。秋海棠止一大圓心。蘭苞淺紅。薰苞淡綠。蘭薰心俱紅白相間。花心俱宜細辨。亦由乎人之不同如其面耳。

【譯】草花の心は、俱に蒂に由りて生じ、木花と同じからず。芍藥・芙蓉は、心、瓣根に雜る。蓮華は心淡く

して蘂黄なり。夜合・山丹・萱花・玉簪は、花六瓣、鬚も亦六莖にして蕊有り。根中別に一根を挺生せるには則ち蕊無し。菊は種類多く、心有ると心無きと、其形色の淺深多寡の同じからざる有り。秋海棠は止だ一大圓心のみ。蘭の苞は淺紅、蕙の苞は淡綠、蘭蕙の心は俱に紅白相間はる。花心は俱に宜しく細に辨ずべし。亦由ほ人心の同じからざるは其面の如きがごときのみ。

【註】瓣根、瓣のもと。○蘂、蕊、同字なり。こゝには花粉の意に用ふ。今の植物學に用ふる意味と異なり。○山丹、ひめゆり。○玉簪、ぎぼうし。○鬚亦六莖有蕊、これは雄蕊をいふ。雄蕊は六本有りて花粉有り。○根中別挺生一根則無蕊、これは雌蕊をいふ。根もとより別に一本拔んでたる者卽ち雌蕊には花粉無し。

【解】草花の心は、いづれも蒂から生じてゐて、木の花とは同じくない。芍藥や芙蓉は、心が瓣のもとに附いて居る。蓮の花は、心は色が淡くて雄蕊の花粉は黄色である。夜合・山丹・萱花・玉簪は、花は六瓣であり、雄蕊も六本有つて花粉が有る。花のもとから別に挺んでて居る一本卽ち雌蕊には花粉が無い。菊は種類が多く、心の有るのも有り心の無いのも有り、形と色には濃いと淡いと多いと寡いとの相違が有る。秋海棠は、ただ一つの大きい圓い心が有るだけである。蘭の苞は淺紅であり、蕙の苞は淡綠であるが、蘭と蕙との心はいづれも紅白相間つて居る。すべて花心はいづれも仔細に觀察し辨別すべきである。其の相異なつて居ることは、ちやうど人の心の同じくないことは其面のやうであるのと同じいのである。

畫花卉總訣

畫花之法、各有專形、上自花葉、下及枝根、俱宜得勢。審察分明、至于花朶、態須輕盈、設色多端、寫之欲生、染脂傅粉、各得其情、開分向背、間以苞英、安頓枝葉、交加縱横、密而不亂、稀而不零、窺其致備、寫其神眞、因其形似、得其精神、在乎能手、筆法所臻、未可言盡、訣以傳心。

【譯】花を畫くの法、各〻專形有り。上は花葉より、下は枝根に及ぶまで、俱に宜しく勢を得、審察分明にすべし。花朶に至りては、態須く輕盈なるべし。設色は多端なり、之を寫すに生きんことを欲す。脂を染め粉を傅け、各〻其情を得。開分向背、間ふるに苞英を以てす。枝葉を安頓して、交加縱横にす。密なれども亂れず、稀なれども零ならず。其致の備はるを窺ひ、其神の眞なるを寫す。其形似に因り、其精神を得るは、能手の、筆法の臻る所に在り。未だ言ひ盡す可からず、訣以て心に傳ふ。

【註】專形、特有の形なり。花には各〻特別なる形有るをいふ。○花朶、花の咲きたる枝。○輕盈、儀態纖弱なるをいふ。しなやかなること。○開分、滿開と半開とをいふ。○苞英、苞と蕚とをいふ。○安頓、安置するなり。書き入れること。○不零、ちり〳〵ばら〳〵にならぬこと。

【解】 花を畫く法は、各種の花には、それ〴〵特有の形が有るので、それを書き分けなければならぬ。上は花や葉より、下は枝や根に至るまで、いづれも勢を得べきであり、審かに觀察し明瞭に特色を知らねばならぬ。花の姿態はしなやかでなければならぬ。彩色の仕方はいろ〳〵あるが、それを寫し出すに生動するやうでありたい。臙脂や胡粉などの顏色を用ひて、それ〴〵其實際の情態に叶ふやうにする。滿開の者や半開の者や、正面の者や背面の者を書き分けて、それに苞や蕚を書き加へる。枝や葉は重なり合つて縱になつたり横になつたりするやうにする。込み合つてゐても亂雜で無く、疎いてゐてもさびしく無いやうにする。其致の完備するやうに心懸け、其眞實なる精神を寫すのである。其形が善く似るやうに寫して、其精神を得ることは、筆法が熟達したる名手にして始めて出來ることである。これは言葉を以て言ひ盡すことは出來ないので、歌訣を作つて諸君の心に傳へるのである。

畫法源流 草蟲

古詩人比興、多取鳥獸草木、而草蟲之微細、亦加寓意焉、夫草蟲既爲詩人所取、畫可忽乎、考之唐宋、凡工花卉、未有不善翎毛、以及草蟲、雖不能另譜源流、然亦有著名獨善者、陳有顧野王、五代有唐垓、宋有郭元方、李延之、僧居寧、是皆以專工著名者、至若丘慶餘、徐熙、趙昌、葛守昌、韓祐、倪濤、孔去非、曾達臣、趙文淑、僧覺心、金之李漢卿、明之孫隆、王乾、陸元厚、韓方、朱先、俱爲花卉中兼善名手、草蟲之外、更有蜂蝶、代有名流、唐滕王嬰善蛺蝶、滕昌祐、徐崇嗣、秦友諒、謝邦顒善蜂蝶、劉永年善蟲魚、袁嵩、趙克夐、趙叔儺、楊暉、更善魚、有涵泳喰喁之態、綴于蘋花荇葉間、亦不讓草蟲蜂蝶之有俾于春花秋卉矣、故附及之、

【譯】 古の詩人の比興には、多く鳥獸草木を取り、而して草蟲の微細なるにも、亦、寓意を加ふ。夫れ草蟲は既に詩人の取る所と爲る。畫、忽ぜにす可けんや。之を唐宋に考ふるに、凡そ花卉に工なるは、未だ翎毛を善くして以て草蟲に及ばざる有らず。另ちて源流を譜すること能はずと雖も、然れども亦、名を著はして獨り善くする者有り。陳に顧野王有り、五代に唐垓有り、宋に郭元方・李延之・僧居寧有り、是れ皆、專ら工なるを以て名を著はせる者なり。丘慶餘・徐熙・趙昌・葛守昌・韓祐・倪濤・孔去非・曾達臣・趙文淑・僧覺心・金の李漢卿・明の孫隆・王乾・陸元厚・韓方・朱先の若きに至りては、俱に花卉の中に兼ね善くする名手たり。草蟲の外に、更に蜂蝶有り、代〻名流有り。唐の滕王嬰は蛺蝶を善くし、滕昌祐・徐崇嗣・秦友諒・謝邦顒は蜂蝶を善くし、劉永年は蟲魚を善くし、袁嵩・趙克夐・趙叔儺・楊暉は、更に魚を善くす。涵泳喰喁の態の、蘋花荇葉の間に綴らる

る有るは、亦、草蟲蜂蝶の春花秋卉に倖有るに讓らず。故に附けて之に及ぶ。

【註】古詩人、詩經の詩を作りたる人をいふ。○比興、詩の六義の二。比とは、他の物事にたとへくらべて此事を述ぶるなり。興とは、全く關係無き他の物を借りて我が意を述ぶるなり。○顧野王、字は希馮、吳の人。梁に在りて中領軍と爲る。後、陳に入りて黄門侍郎・光祿卿と爲る。嘗て古賢を繪き、尤も草蟲に工なり。王褒に與ふる書贊、時人特に二絶と稱す。七歳にして經に通じ、九歳にして能く文を屬り、年十二にして建安地記を撰す。長じて徧く經史を覩、精記默識し、天文地理・蓍龜占候・蟲篆奇字、通ぜざる所無し。少くして篤學至性を以て名を知らる。朝に在りて過辭失色無し。容貌、言ふこと能はざるに似たり。其の精を勵まし行を力むること、皆、人、及ぶ莫し。梁の天監庚子生れ、太建辛丑卒す。年六十二。祕書監・右衛將軍を贈らる。玉篇・輿地志・符瑞圖・顧氏譜・分野樞要・續洞冥記・元象集及び文集有り。○唐垓、五代の人、野禽・水族・生菜・鳥蟲・草木、咸、精妙と稱せらる。○郭元方、字は子正、宋の開封の人。官、內殿承制に至る。草蟲を善くし、手に信せて興を寓して生態有り。○李延之、宋の人。官、右班殿直に至る。魚蟲草木禽獸、詩人の風雅を得、寫生尤も工にして、近習に隨はず。○僧居寧、宋の毘陵の人。醉後好んで戲墨を爲り、工に水墨の草蟲を圖寫し、長さ四五寸の者有り、筆力勁俊にして、形似を專らにせず。每に自ら題して居寧醉筆と曰ふ。○葛守昌、宋の京師の人、畫院祗候たり。花竹翎毛に工に、草蟲蔬菓を兼ね、率ね生意有り。○韓祐、宋の石城の人、紹興の畫院祗候たり。寫生の小景を善くし、林椿の花鳥草蟲を師とす。○倪濤、字は巨濟、宋の永嘉の人、廣德軍に徙る。年十五にして、太學に試みられて第一なり。大觀己丑、進士に擢でらる。左司員外郎を歷たり。宣和の間、都司と爲る。墨戲の草蟲を善くす。卯角にして文を能くし詩に工なり。朝廷、燕雲に事有らんと議す。大臣、先を爭うて策を決し、位を固むる計を爲す。皆、心に不可なるを知れども、敢て一も口に出す無し。獨り濤のみ其非なるを言ひ、監酒稅に貶せられて卒す。年三十九。明年、金人、闕を犯す。朝廷、其言を憶ひ、其一子を官にす。雲陽集・玉溪集を著はす。○孔去非、宋の汝州の人、小筆清雅にして玩ぶ可く、草蟲蟻蝶蜂蟬竹雀に工なり。○曾達臣、歸愚居士と號す。江西の人、草蟲に工なり。○趙文淑、文淑は、字は端容、吳中の文彥可の女、高士趙靈均の妻なり。奇花異卉、小蟲怪鳥、筆に信せて渲染し、皆能く性情を撫寫し、鮮妍生動す。徐熙の野逸と雖も、是れに過ぎざるなり。蒼松怪石に至りては、則ち又老勁なり。曾て其暇を以て湘君搗素・惜花美人の諸圖を繪く、吳中の閨秀、三百年來、特に其丹青を推重す。惜しむらくは中年羽化し、僞筆傳摹甚だ多し。明末清初の人なり。ここに宋とせるは誤なり。○僧覺心、字は虛聯、宋の嘉州夾江の農家の子、山水に工に、草蟲を作る。南都稱して心草蟲と爲す。詩に放に、畫に遊戲し、煙雲水月の、太虛に出沒するが如し。謂はゆる風、水上を行き、自ら文理を爲す者なり。陳去非も亦、其詩に一點の僧氣無しと稱す。○李漢卿、金の東平の人、草蟲に工なり。○孫隆、字は從吉、都癡と號す。毘陵の人。開國忠愍侯の孫なり。天順中、新安知府と爲る。梅花は王冕の筆法を得、禽魚草蟲は徐熙の逸趣を得、自ら一家を成し、沒骨圖と號す。○王乾、字は一清、初め歳春と號し、又、天峰と號す。明の臨海の人。輕墨淺彩を以て禽蟲花卉を作り、間ま山石林藪を作り、尤も寒塘野鳧泊泳朝暮の態に妙なり。○陸元厚、明の人、草蟲畫に工なれども、多く人の爲めに作らず。書は急就を摹す。性方嚴にして、童師と爲り、學俸を以て異書を蓄ふ。公卿の、節を折りて之に交は

る者には、僅に一たび報謁し、數〻往かざるなり。○韓方、明の人、字は中直、鶴仙と號す。歸德衛指揮たり。善く梅竹草蟲を寫す。○朱先、字は允先、明の武進の人。草蟲を善くす。○滕王嬰、滕王元嬰は、唐の高祖の二十二子。貞觀の時、金州刺史を授けらる。武后の時、進んで開府儀同三司・梁州都督に拜せられ、司徒を贈らる。喜んで蜂蝶を作り、曲に精理を盡す。○秦友諒、宋の毘陵の人。少くして縣吏と爲る。草蟲花卉蟬蝶を善くし、傳色輕妙なり。人これを稱す。○謝邦顯、恐らくは單邦顯の誤ならん。單邦顯は宋の吳郡の人。趙伯駒に學び、林木山水は師に及ばず、花卉蜂蝶は髣髴たり。○劉永年、字は君錫、宋の彭城の人、開封に徙る。章獻后の從孫なり。仁宗の時、崇信軍節度使たり。鳥獸蟲魚を作り、頗る道釋人物に工に、貫休の奇逸を得たり。喜んで書を讀み、翰墨に從事す。兵法に通じ、勇力、人を兼ぬ。莊恪と謚す。○袁嵩、後唐の河南登封の人、侍衛親軍に隷す。魚を畫きて其喰喁游泳の狀を窮む。○趙克夐、宋の宗室にして、右武衛大將軍・漳州團練使と爲る。游魚は浮沈の態を得たり。歿して保康軍節度使を贈られ、高密侯に追封せらる。○趙叔儺、宋の宗室にして、濮州防禦使たり。意を禽魚に得、筆を下せば詩意に默合す。或は圖繪を鋪張し、景物は少しと雖も、意は常に多く、覽る者、之に因りて想を遐くす可し。歿して少師を贈らる。○楊暉、南唐の江南の人。魚を畫きて警を揚げ鬣を鼓するの態を得、水草に工なり。○涵泳、水の中にひたりおよぐこと。○喰喁、あぎとふ。魚が口を水面にあらはして浮ぶこと。○蘋花、うきくさの花。和名、かたばみも、かつみ。○荇、あさざ。水草の一。はなじゅんさい、とも云ふ。○俾、當に裨に作るべし。

【解】 古の詩經の詩人の比と興とには、多く鳥獸草木を用ひてゐる。そして微細なる草蟲にも感興の意を寓して居る。草蟲は古の詩人に用ひられたのである。して見ると草蟲の畫も輕忽にすることは出來ない。唐宋時代を考へて見れば、凡そ巧に花卉を畫いた人は、善く翎毛及び草蟲を畫かなかつた人は無い。從つて草蟲の畫だけを別けて其本末の系統を立てることは出來ないけれども、草蟲のみを善く畫いたので著名なる人も無いでは無い。陳には顧野王が有る。五代には唐垓が有る。宋には郭元方・李延之・僧居寧が有る。これ等の人人は、皆、草蟲のみを巧に畫いたので有名なる人である。丘慶餘・徐熙・趙昌・葛守昌・韓祐・倪濤・孔去非・曾達臣・趙文淑・僧覺心・金の李漢卿・明の孫隆・王乾・陸元厚・韓方・朱先等の如きは、いづれも、善く花卉を畫き、兼ねて草蟲に巧なる人である。草蟲の外に、更に蜂や蝶が有つて、代々之を巧に畫く名流が有つた。唐の滕王元嬰は、善く蝶を畫いた。滕昌祐・徐崇嗣・秦友諒・謝邦顯は善く蜂や蝶を畫いた。劉永年は善く蟲と魚を畫いた。袁嵩・趙克夐・趙叔儺・楊暉は更に善く魚を畫いた。魚が水中に游ぎまはつたり、又は水面に浮んで仰いで口を動かして居る狀態を、うきくさの花や荇の葉の間に書き添へるときは、これ亦、草蟲や蜂

や蝶などが春の花や秋の草の情味を裨補するに劣らないのである。それ故に、草蟲のついでに魚にも及んだのである。

畫草蟲法

畫草蟲須要得其飛翻鳴躍之狀。飛者翅展。翻者翅折。鳴者如振羽切股。有喓喓之聲。躍者如挺身翹足。有趯趯之狀。蜂蝶必大小四翅。草蟲多長短六足。蝶翅形色不一。以粉墨黃三色爲正。形色變化多端。未可言盡。黑蝶則翅大而後拖長尾。安于春花者。宜翅柔肚大後翅尾肥。以初變故也。安于秋花者。宜翅勁肚瘦而翅尾長。以其將老故也。有目有嘴。有雙鬚。其嘴。飛則拳而成圈。止者卽伸長入花吸心。草蟲之形。雖大小長短不同。然其色亦因時變。草木茂盛。則色全綠。草木黃落。色亦漸蒼。雖屬點綴。亦在乎審察其時安頓之也。

【譯】草蟲を畫くには、須く其飛翻鳴躍の狀を得るを要すべし。飛ぶ者は翅展ぶ。翻る者は翅折る。鳴く者は羽を振ひ股を切りて喓喓の聲有るが如し。躍る者は、身を挺で足を翹げて趯趯の狀有るが如し。蜂蝶は必ず大小四翅あり。草蟲は多くは長短六足あり。蝶の翅の形色は一ならず。粉墨黃の三色を以て正と爲す。形色の變化は多端にして、未だ言ひ盡す可からず。黑蝶は則ち翅大にして後に長尾を拖く。春花に安んずる者は、宜しく翅柔かに肚大に後翅尾肥ゆべし。初めて變ずるを以ての故なり。秋花に安んずる者は、宜しく翅勁く肚瘦せて翅尾長かるべし。其の將に老いんとするを以ての故なり。目有り、嘴有り、雙鬚有り。其嘴は、飛べば則ち拳して圈と成り、止まる者は卽ち伸長して花に入りて心を吸ふ。草蟲の形は、大小長短同じからずと雖も、然れども其色も亦時に因りて變ず。草木茂盛なれば、則ち色全く綠に、草木黃落すれば、色も亦漸く蒼なり。點綴に屬すと雖も、亦、審かに其時を察して之を安頓するに在るなり。

【註】喓喓、蟲の鳴く聲なり。詩經に喓喓草蟲とあり。○趯趯、跳ぶ貌。詩經に趯趯阜螽とあり。○雙鬚、二本のひげ。卽ち蝶の觸角なり。○拳、かがまる。○點綴、畫の中の主要なる者に非ず、あしらひとして書き入るるをいふ。

【解】草蟲を畫くには、必ず其れが飛んだり翻つたり鳴いたり躍ねたりする狀態を書きあらはすを得ることを要する。飛んで居る者は翅が展びて居る。ひら〳〵と舞ひ翻つて居る者は翅が折れたやうになつて居る。（後の蛺蝶の折翅下飛の圖を參看せよ。）鳴いて居る者は、羽を振つて股を磨つて、喓喓として鳴いて居るやうにする。跳ね躍る者は、身を挺で足をつまだてて、趯趯として飛んで居るやうにする。蜂と蝶とには必ず大小四枚の翅が有る。草蟲には多くは長短六本の足が有る。蝶の翅の形と色とは

樣々有るが、胡粉と墨と黃との三色を正式のものとする。形と色との變化は數多く、言ひ盡すことは出來ない。黑い蝶は翅が大きくて、後に長い尾が出てゐる。春の花に書き添へる者は、翅は柔かに肚は大きく後の翅の尾は肥えて居るが宜しい。これは初めて變化して蝶になつた故である。秋の花に書き添へる者は、翅は勁く肚は瘦せて翅の尾は長いが宜しい。これは其れが將に老いんとして居る故である。蝶には目も有り、嘴も有り、二本の鬚が有る。其嘴は、飛ぶときには拳曲つて圈になる。止まるときには長く伸びて花に入つて心を吸ふ。草蟲の形は、大きいのも有り、小さいのも有り、長いのも有り、短いのも有り、色々有るが、其色も時に因つて變化する。草木が茂りさかえて居る時節には、蟲の色も全く綠であるが、草木の葉が黃ばんで落ちる時節には、蟲の色もだん〳〵にくすんで來る。蜂や蝶や草蟲の類は、畫面のあしらひとして書き入れる者であるけれども、其時節を審かに考慮して適當なる者を書き入れるべきである。

畫草蟲訣

草蟲與翎毛。其法各自別。草蟲多點染。翎毛重鈎勒。當年滕昌祐。寫生盡曲折。花果寫丹青。蟬蝶寫以墨。更有丘慶餘。寫花能設色。以墨寫草蟲。點染分黑白。形似得其眞。古人有是格。後之善草蟲。相繼有趙昌郭守昌飛躍勢若生。設色工王嬰。擅名工蛺蝶。

【譯】草蟲と翎毛と、其法各自別なり。草蟲は點染多く、翎毛は鈎勒を重んず。當年の滕昌祐、寫生して曲折を盡す。花果は寫すに丹青、蟬蝶は寫すに墨を以てす。更に丘慶餘有り、花を寫して能く設色し、墨を以て草蟲を寫し、點染して黑白を分つ。形似その眞を得る、古人この格有り。後の草蟲を善くする、相繼ぎて趙昌郭守昌有り。飛躍して勢生くるが若く、設色して點畫に工なり。微細に其形を得、神先づ筆下に得。豈に獨り滕王嬰のみ、名を蛺蝶に工なるに擅にせんや。

【註】盡曲折、委細を盡さあらはすをいふ。曲折は、込み入りたる事情なり。○趙郭、趙は趙昌なること原註に記するが如し。郭は原註に守昌とあれども、郭守昌といふ畫人は、佩文齋書畫譜・畫史彙傳に見えず。守昌と註せるは恐らくは誤にして、宋の郭元方、字は子正をいふなるべし。

【解】草蟲と翎毛とは、之を畫く法は各〻異なつて居る。草蟲は多くは點染を以て畫き、翎毛は多くは鈎勒を以て畫く。昔の滕昌祐は、寫生して精細を極めたが、花や果實は丹青を用ひて寫し、蟬や蝶は墨のみを用ひて寫した。又、丘慶餘は、花を寫すに彩

色を施し、墨を以て草蟲を畫き、點染して黑白を十分に現はした。形狀が善く似て眞に逼ることは、古人に此法式が有つた。これに繼いで草蟲に工なる畫人には、趙昌と郭守昌とが有る。これ等の人の畫いた者は、飛び跳ねてゐる勢が生きて居るが如くであり、彩色を施して巧に點畫し、詳細に其形を寫し、精神が先づ筆さきに現はれて居る。ただ唐の滕王元嬰のみが蝶を畫くに工であつたと謂ふわけには行かぬのである。

畫蛺蝶訣

凡物先畫首。畫蝶翅爲先。翅得蝶之要。全體神采兼。翅飛身半露。翅立身始全。蝶首有雙鬚。嘴在雙鬚間。採香嘴則舒。飛翻嘴連拳。朝飛翅向上。夜宿翅倒懸。出入花叢裏。丰致自翩翩。有花須有蝶。花色愈增妍。渾如美人旁。追隨有雙鬢。

【註】凡そ物は先づ首を畫く、蝶を畫くには翅を先と爲す。翅は蝶の要を得、全體神采を兼ぬ。翅飛べば身半ば露はれ、翅立てば身始めて全し。蝶の首に雙鬚有り、嘴は雙鬚の間に在り。香を採れば嘴則ち舒び、飛翻すれば嘴連拳たり。朝に飛べは翅上に向ひ、夜宿すれば翅倒さまに懸る。花叢の裏に出入し、丰致自ら翩翩たり。花有れば須く蝶有るべし、花色愈〻妍を增す。渾て美人の旁に、追隨して雙鬢有るが如し。

【註】神采、精神と風采。○連拳、かがまること。○丰致、うつくしきすがた。○雙鬢、年若き侍女、腰元。

【解】すべて物は先づ首を畫くが、蝶を畫くには翅を先づ畫く。翅は蝶の最も重要なるところであつて、其全體と精神風采とが兼ね備はつて居る。蝶が翅をひろげて飛ぶときには身が半分露はれ、翅を立てて止まつて居るときには始めて全身が露はれる。蝶の首には二本の鬚が有り、嘴は二本の鬚の間に在る。花にとまつて香を採るときには嘴が長く舒び、ひら〳〵と飛びまはるときには嘴は屈まつて圓くなる。朝になつて飛びまはるときには、翅は上に向つて居り、夜になつて寢るときには、翅は下に向つて垂れて居る。花園の中に出入して、うつくしい容子でひら〳〵と飛んでゐる。花が有るときは必ず蝶が有るべきである。さうすれば、花の色はいよ〳〵美くしさを增す。すべて美人の旁には若い腰元がお供して居るやうなものである。

畫螳螂訣

螳螂雖小物。畫此宜威嚴。狀其攫物時。望之如虎焉。雙眸勢欲吞。情形極貪饞。所以殺伐聲。形諸琴瑟間。

【譯】螳螂は小物なりと雖も、此れを畫くには宜しく威嚴あるべし。其の物を攫む時を狀するには、之を望めば虎の如し。雙眸の勢は呑まんと欲し、情形は極めて貪饞なり。所以に殺伐の氣、諸を琴瑟の間に形はす。

【註】雙眸、二つのひとみ。○貪饞、貪慾なること。饞は食物又は物品をむさぼるなり。○殺伐聲形諸琴瑟間、物を殺しそこなふ音聲が琴瑟の絃より發せり。これは後漢の蔡邕の故事より出づ。華嶠の漢書に曰く『初め蔡邕、陳留に在り。鄰人、酒を以て邕を召す者有り。往くに比びて酒以に酣なり。客、琴を屏に彈ずる有り。邕、門に至りて潛に之を聽きて曰く、樂を以て我を召せるに殺心有るは何ぞやと。遂に反る。命を將ふ者、主人に告ぐるに、蔡君は門に至りたれども去りしことを以てす。邕は素より邦鄉の宗とする所と爲る。主人遂に自ら追うて其故を問ふ。邕具に以て告ぐ。憮然たらざるもの莫し。琴を彈ぜし者曰く、我向に螳螂が鳴蟬に向ふを見る。蟬將に去らんとして未だ飛ばず。螳螂、之が爲めに一たびは前み一たびは却く。吾が心聳然として惟だ螳螂の蟬を失はんことを恐れき。此れ豈に殺心にして聲に形はるる者たらんかと。邕笑つて曰く、此れ以て之に當るに足ると。』

【解】螳螂は小さい物であるけれども、これを畫くにはいかめしき威嚴を具へるべきである。それが物を攫むところを寫すには、之を望めば虎の如くにする。二つの眼玉の勢は其物を呑まうとするやうであり、其樣子は極めて貪慾である。それ故に、昔、殺伐の氣分が、琴瑟の音の間にあらはれたのである。

畫百蟲訣

古人畫虎鵠。尙類狗與鶩。今看畫羽蟲。形意兩俱足。行者勢若去。飛者翻若逐。拒者如舉臂。鳴者如動腹。躍者趯其股。顧者注其目。乃知造化靈。未抵毫端速。

梅聖俞觀居寧畫草蟲詩。

【譯】古人は虎鵠を畫き、尙ほ狗と鶩とに類せり。今畫ける草蟲を看るに、形意兩つながら俱に足る。行く者は勢去るが若く、飛ぶ者は翻ること逐ふが若し。拒ぐ者は臂を擧ぐるが如く、鳴く者は腹を動かすが如し。躍る者は其股を趯かし、顧みる者は其目を注ぐ。乃ち知る造化の靈、未だ毫端の速かなるに抵らざるを。梅聖俞が居寧の畫ける草蟲を看る詩。

【註】古人畫虎鵠、尙類狗與鶩、古人、虎を畫きたるに狗に似、鵠を畫きたるに鶩に似たり。鵠は雁に似て大なる鳥、和名くぐひ。後漢の伏波將軍馬援、交趾に在り、書を遺りて兄の子嚴と敦とを誡めて曰く、龍伯高は敦厚周愼なり。吾、汝が曹の之に效はんことを願はざるなり。杜季良は、豪俠にして義を好む。吾、汝が曹の之に效はんことを願ふ。杜季良は、豪俠にして義を好む。吾、汝が曹の之に效はんことを願はざるなり。伯高に效うて得ざるも、猶ほ謹敕の士と爲らん。謂はゆる鵠を刻して成らざるも尙ほ鶩に類する者なり。季良に效うて得ずんば、陷りて天下の輕薄の子と爲らん。謂はゆる虎を畫きて成らずんば反つて狗に類する者なりと。○毫端、筆のさき、○梅聖俞、宋の梅堯臣、字は聖俞、詩に工にして深遠古淡を

以て意と爲し、歐陽修と詩友たり。官、都官員外郎に至る。宛陵集六十卷、附錄一卷有り。ここに載せたるは梅聖俞が僧居寧の草蟲の畫を觀たる詩にして、ここに取りて畫訣とし、草蟲を畫くには、此の如く生動活躍せざる可からざることを說くなり。

【解】 古人は虎を畫きたるに狗に似、鵠を畫きたるに鶩に似たといふ。然る今、この羽ある蟲の畫を看ると、形も善く似て眞に逼つて居り、意氣も遺憾無く現はされて居る。歩いて居る者の勢は彼方に向つて去るやうであり、飛んで居る者はひら〳〵と翻つて逐つかけて居るやうであり、拒ぐ者は臂を擧げて居るやうであり、鳴いて居る者は腹を動かして居るやうであり、跳ねて居る者は股を動かして居り、後を振り返つて居る者は目を注いでぢーッと見つめて居るやうである。これに由つて觀れば、造化の靈妙なる働も、畫家の筆の先の働の神速なるには及ばないのである。

畫魚訣

畫魚須活潑。得其游泳像。見影如欲驚。噞喁意閒放。浮沈荇藻間。清流恣蕩漾。悠然羨其樂。與人同意況。若不得其神。只徒肖其狀。雖寫溪澗中。不異磋俎上。

【譯】 魚を畫くには須く活潑にして、其游泳の像を得べし。影を見れば驚かんと欲するが如く、噞喁して意閒放なり。荇藻の間に浮沈し、清流に恣に蕩漾たり。悠然として其樂に羨り、人と意況を同じくす。若し其神を得ず、只だ徒に其狀を肖するのみならば、溪澗の中を寫すと雖も、磋俎の上に異ならず。

【註】 閒放、ゆつたりと氣ままにして居ること。○蕩漾、水のまに〳〵游ぎまはるさま。○羨其樂、羨は餘るなり。うらやむに非ず。其樂、餘り有るをいふ。○意況、意識の狀況。氣分。○磋俎、まないた。

【解】 魚を畫くには、いき〳〵として元氣よく、其の水中に游いで居る情態を畫きあらはすことを要する。物の影を見るときは、驚いて逃げようとするやうであり、水面に浮んで仰いで口を動かして居るときは、ゆつたりとして氣ままにして居り、荇や藻の間に浮きつ沈みつし、清き流に思ひのままにおよぎまはり、心のごかにして樂餘り有り、人間と同じ氣持を持つて居る。若し其精神を寫し得ず、只だ徒らに形が似て居るだけであるならば、溪川の中に游いで居る魚を畫いたとしても、磋俎の上に死んで居る魚と違はないのである。

草本各花頭起手式（草本の各種の花の書き方）

四瓣五瓣花頭（四瓣と五瓣の花）

虞美人花（ぐびじんくわ）
秋海棠（しうかいだう）
金鳳花（きんぽうくわ）

草本各花頭起手式

四瓣

虞美人花

五瓣

金鳳花

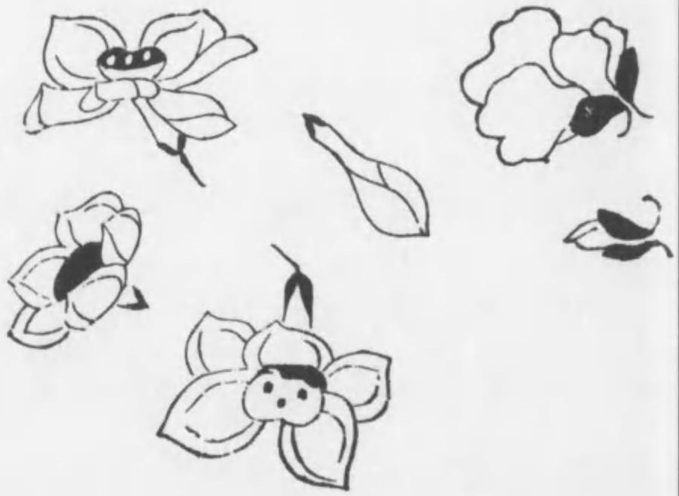
秋海棠

秋葵（しうき）（とろろ）
水仙（すゐせん）

瓣花頭

秋葵

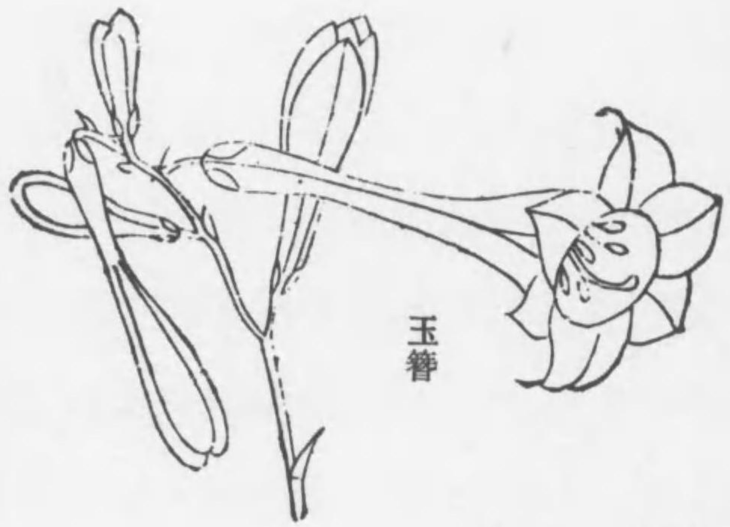
水仙

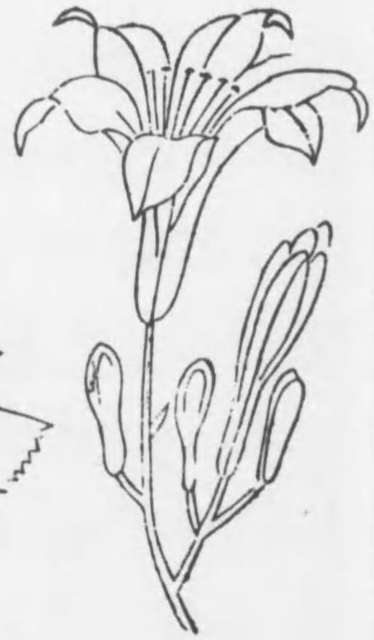


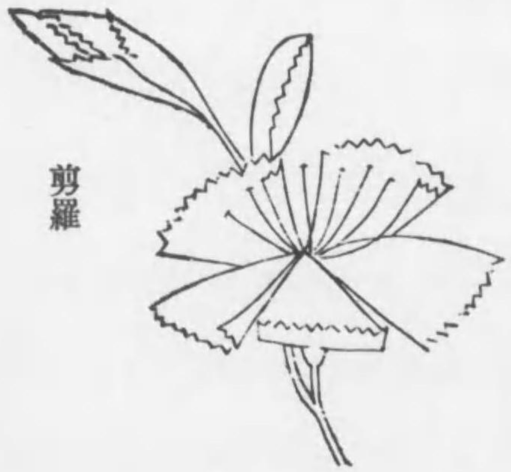
五瓣六瓣長蒂花頭（五瓣と六瓣との蒂（たい）の長き花）
百合（ゆり）
山丹（ひめゆり）
萱花（くわんざう）

萱花

玉簪（ぎぼうし）
剪羅（せんらうげ）（仙翁花）







缺亞多瓣大花頭（切れ込み有る瓣の多き大なる花）

芍藥（しやくやく）

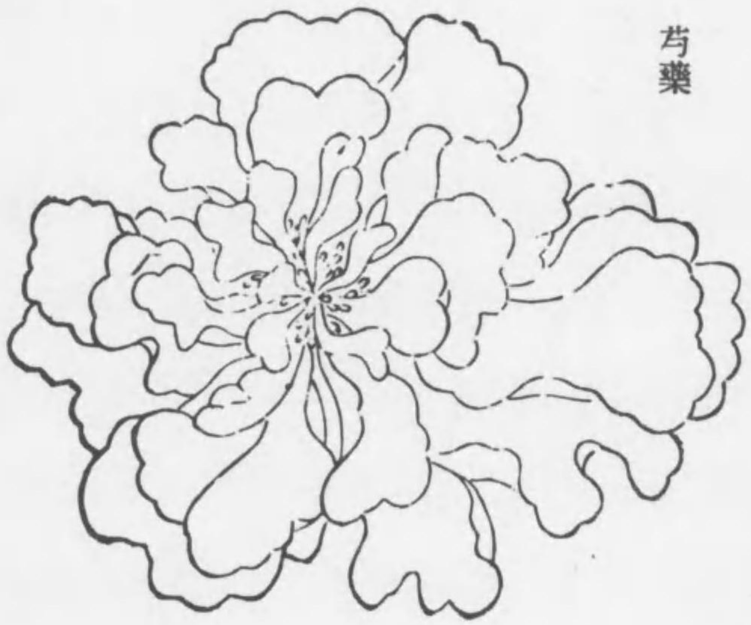
蜀葵（しよくき）（からあふひ）

鶯粟（けし）

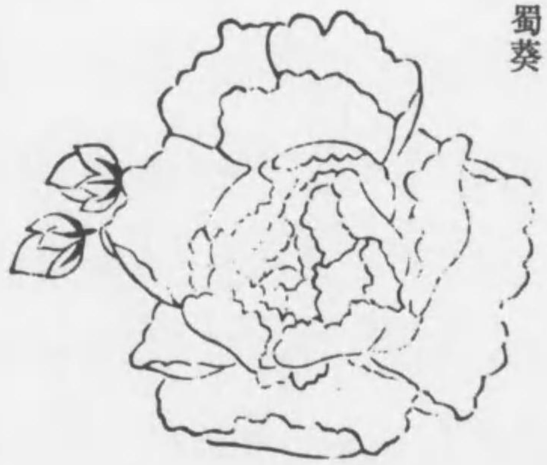
芙蓉（ふよう）

缺亞多瓣

芍藥

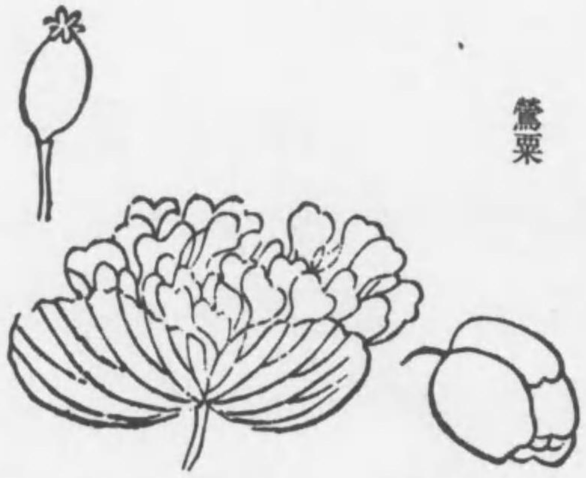


蜀葵

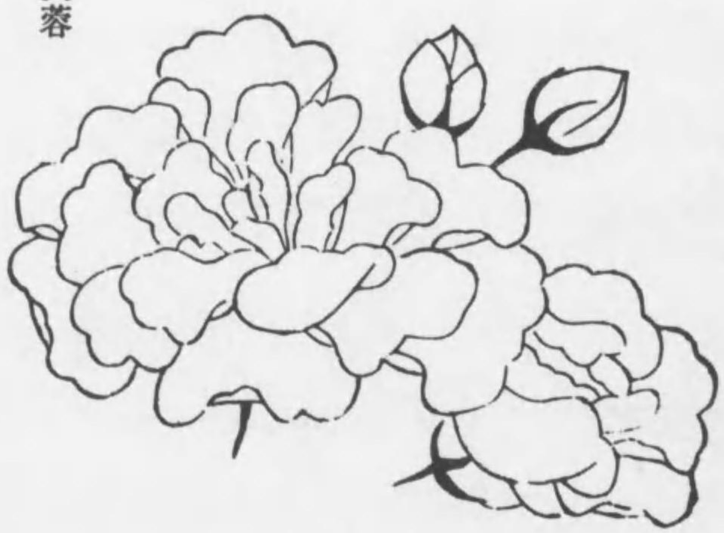


大花頭

鶯粟



芙蓉



尖圓大瓣蓮花（尖りて圓き大なる瓣の蓮の花）

蘭苕（はすの花）

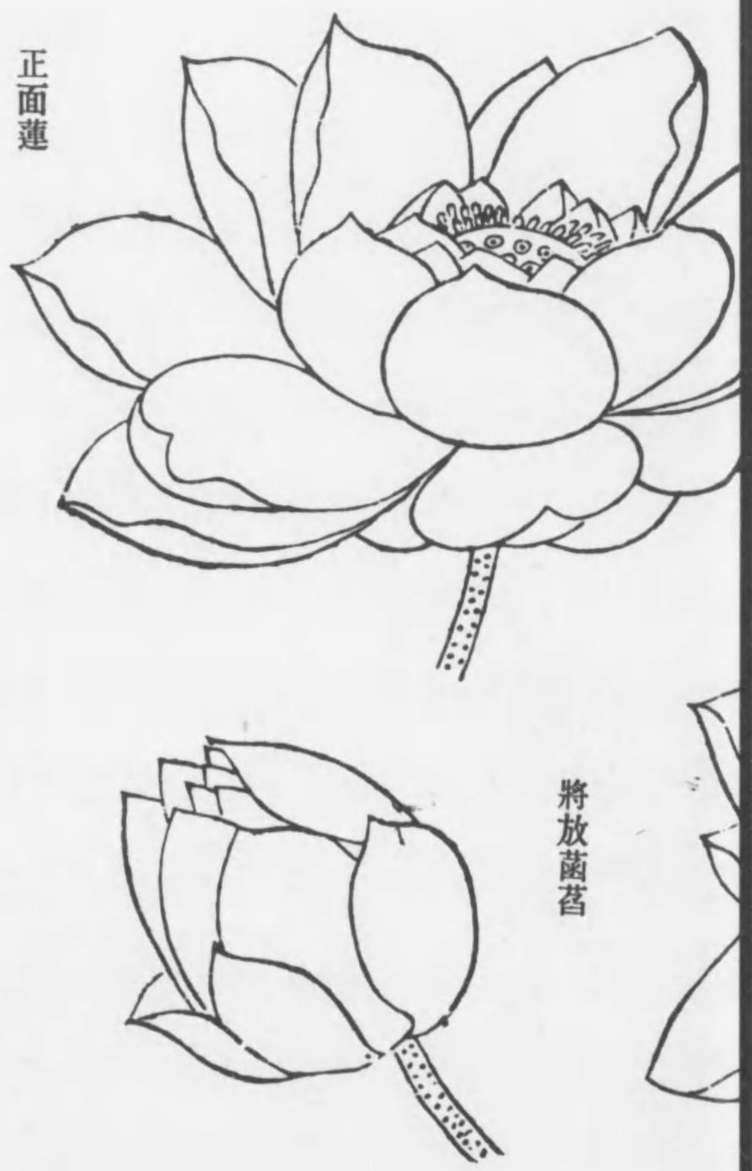
側面の蓮

尖圓大瓣蓮花

正面の蓮

將に放かんとする蘭苕（はすのはな）

瓣蓮花



各種異形花頭（各種の形異なりたる花）

僧鞋菊（とりかぶと）
蝴蝶花（しやが）
牽牛花（あさがほ）
石竹花

各種異

魚兒牡丹（けまんさう）
金盞花
翠蛾眉（つゆくさ）
西番菊

形花頭

草木各花葉起手式（草花の葉の書き方）

各種尖葉（各種のさきの尖りたる葉）

山丹（ひめゆり）

百合（ゆり）

金鳳（きんぽう）

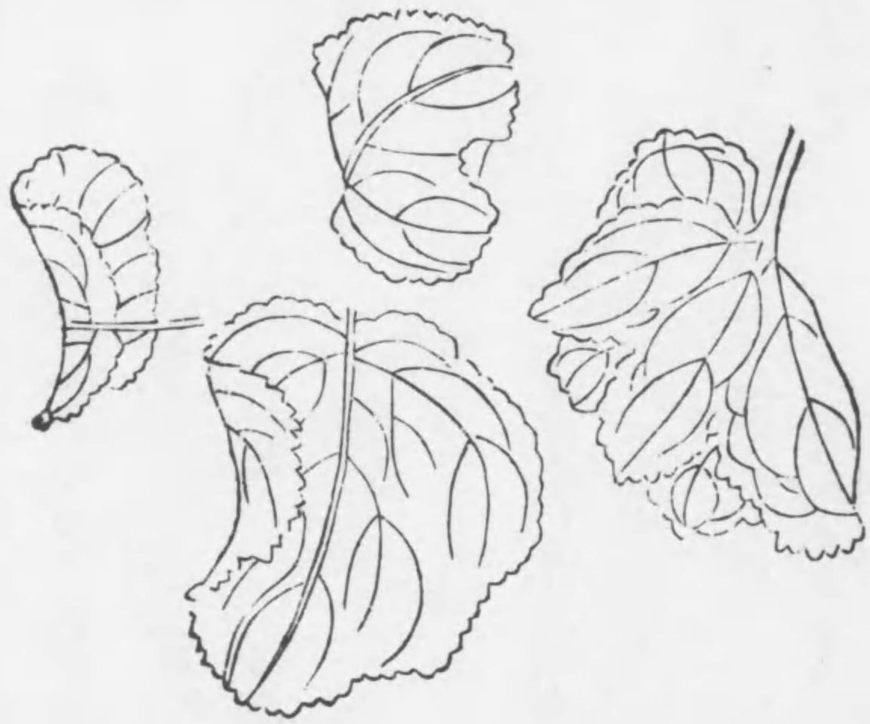
雞冠（けいかん）（けいとう）

草本各花葉起手式

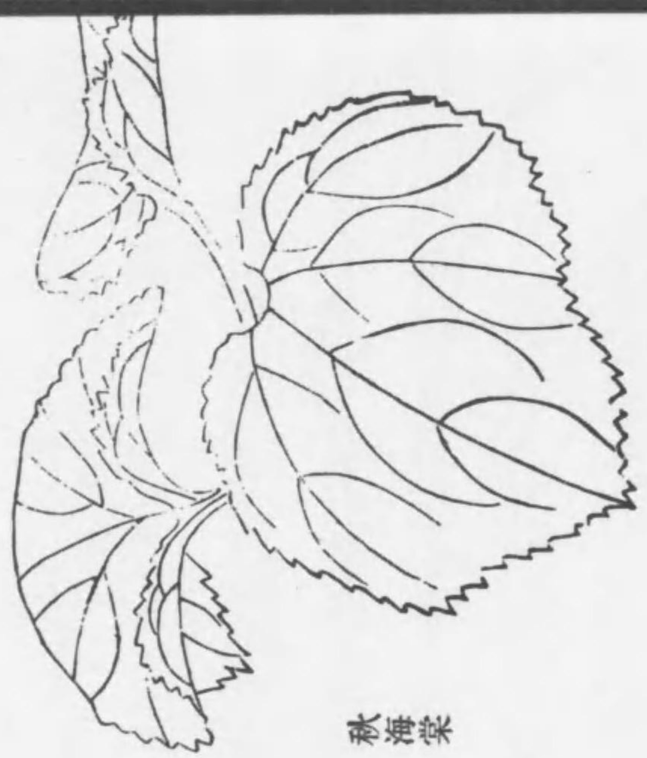
各種

尖葉

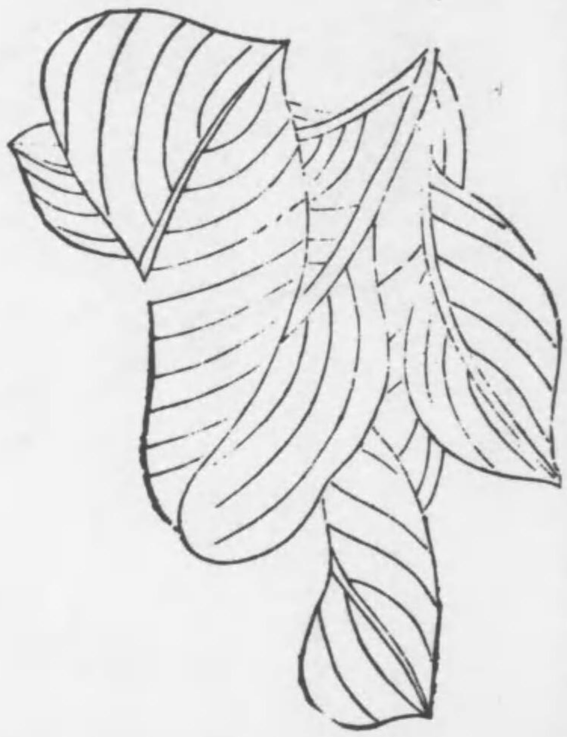
各種葉圖



蜀葵



秋海棠



玉簪

蜀葵（各部圖葉（各種の圖を兼ねる））

玉簪（ぎょくしん）　秋海棠（しうかいだう）

各種岐葉（各種の分岐したる葉）

秋葵

芙蓉

僧鞋菊

各種

秋葵

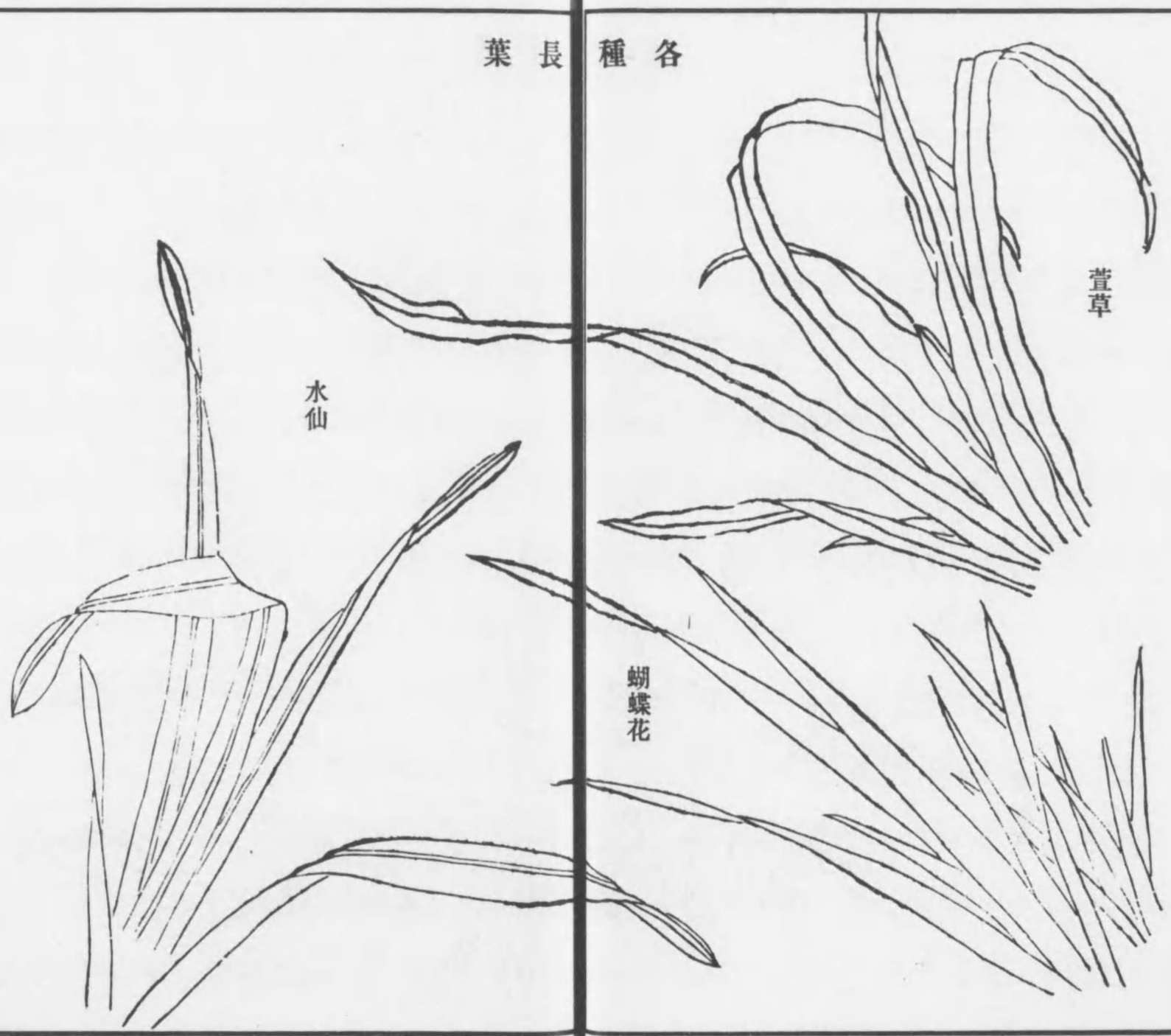
岐葉

芙蓉

僧鞋菊

各種長葉（各種の長き葉）
萱草（くわんざう）
蝴蝶花（こてふくわ）（しやが）

水仙（すゐせん）



各種亞葉（各種の切れ込みある葉）
芍藥（しやくやく）

各種

芍藥

鶯粟（げし）
虞美人（ぐびとん）

亞葉

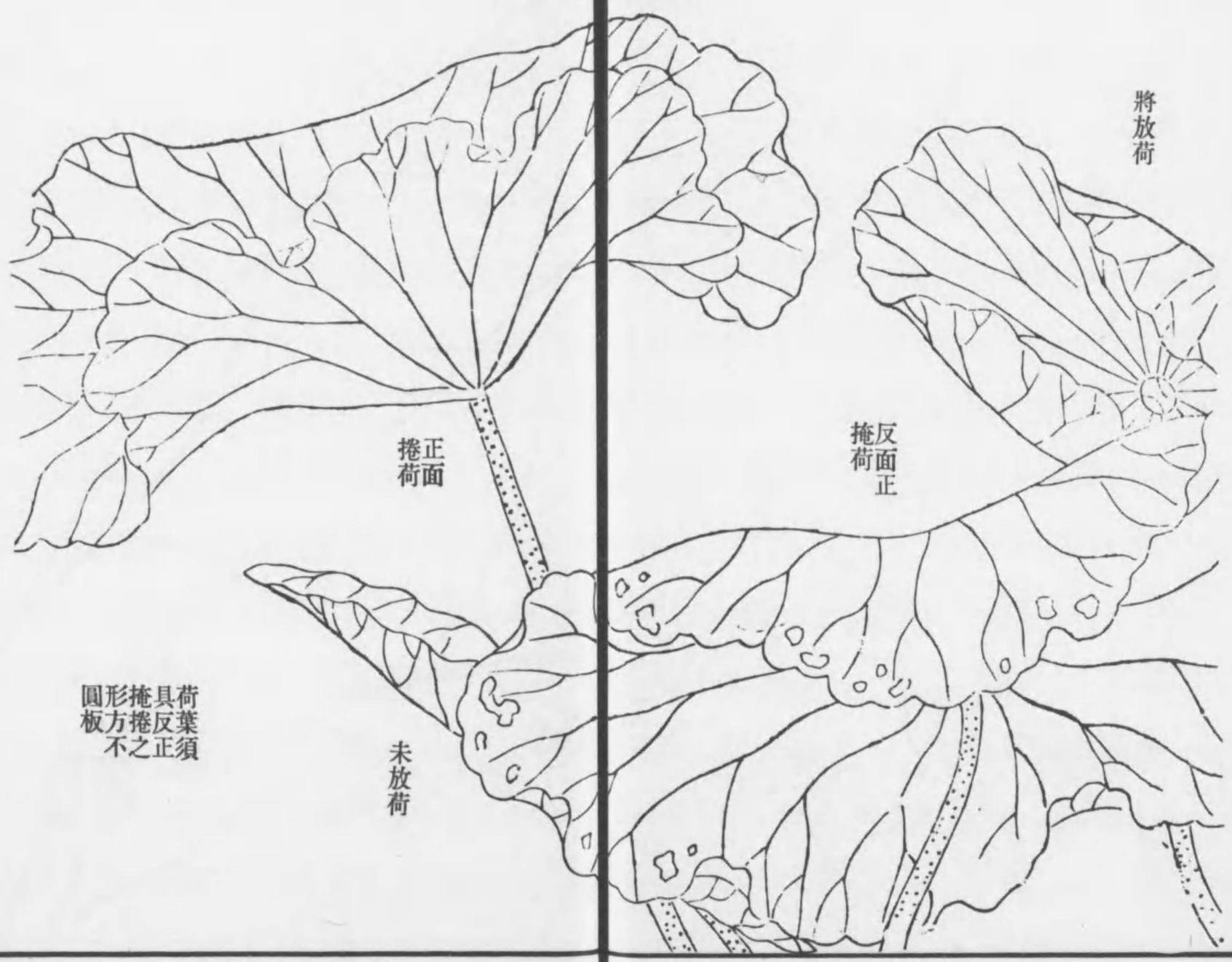
鶯粟

虞美人

各種圓葉（各種の圓形なる葉）

將に放かんとする荷（開きかゝつて居る蓮の葉）

反面正掩荷（反面の蓮の葉にして正面の幾分か見えるもの）



正面捲荷（正面の蓮の葉にして裏の幾分か見えるもの）

未だ放かざる荷（まだ開かざる蓮の葉）

荷葉は須く反正掩捲の形を具ふべし。方に圓板ならず。

解　荷葉を畫くには反面、正面、掩葉、捲葉の四つの形の葉を具備することを要する。かくて始めて圓いばかりで變化無く薄つぺらな病弊を免れられる。

荷葉須具反正掩捲之形方不圓板

正面捲荷

未放荷

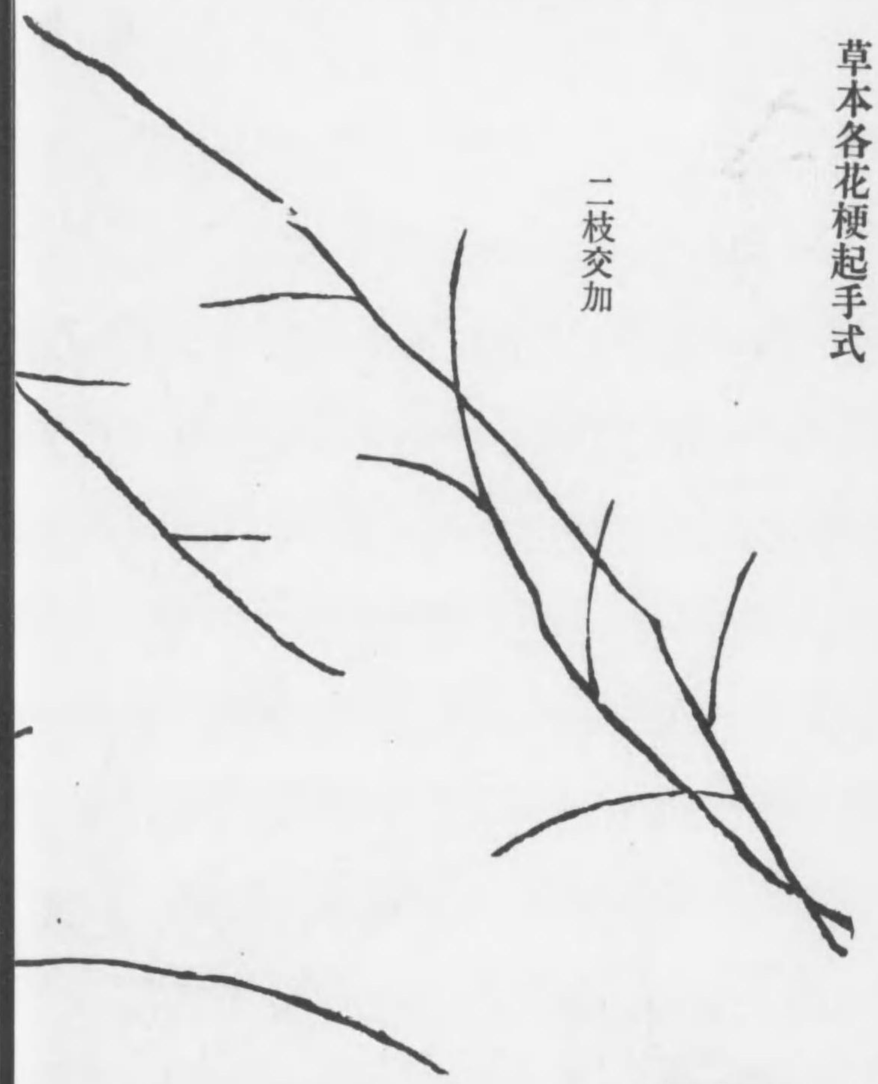
草本各花梗起手式

草本各花梗起手式（草花の花咲く枝の書き方）

二枝交加（二本の枝が重なり合つて居る）

此三枝は單莖の諸花に宜し。旁生の小枝は葉を生ずる處と作す。

解　此三本の枝は、一個咲く諸種の花を著けるに宜しい。旁から出て居る枝は葉の出る處とする。



三枝倒垂（三本の枝が倒に垂れて居る）

三枝穿挿（三本の枝の組み合はせ）

下垂枝（下に向つて垂れたる枝）

上仰枝（上に向つて出て居る枝）

此二枝は、展長（てんちやう）せば、芙蓉と作（な）す可し。

解　此二本の枝は、長く展（の）ばすときは、芙蓉の枝としても宜しい。

三根穿挿（三本の根もとの組み合はせ）

三枝交加（三本の枝が重なり合つて居る）

此枝は、展長せば、蜀葵・秋葵・鶯粟の枝と作す可し。

解　此枝は、長く伸ばせば、蜀葵や秋葵や鶯粟の枝としても宜しい。

芍藥の根枝（根もとと枝）

芍藥根枝

三枝交加
此枝展長可
作蜀葵秋葵
鶯粟枝

紅蓼（いぬたで）の枝節（えだとふし）

紅蓼枝節

根下點綴苔草式

根下點綴苔草式（根もとにあしらふ苔草の書き方）

霜後の衰草（霜降りて衰へたる草）

遮根の茂草（根もとを蔽ふ茂りたる草）

枯草根（枯れた草の根もと）

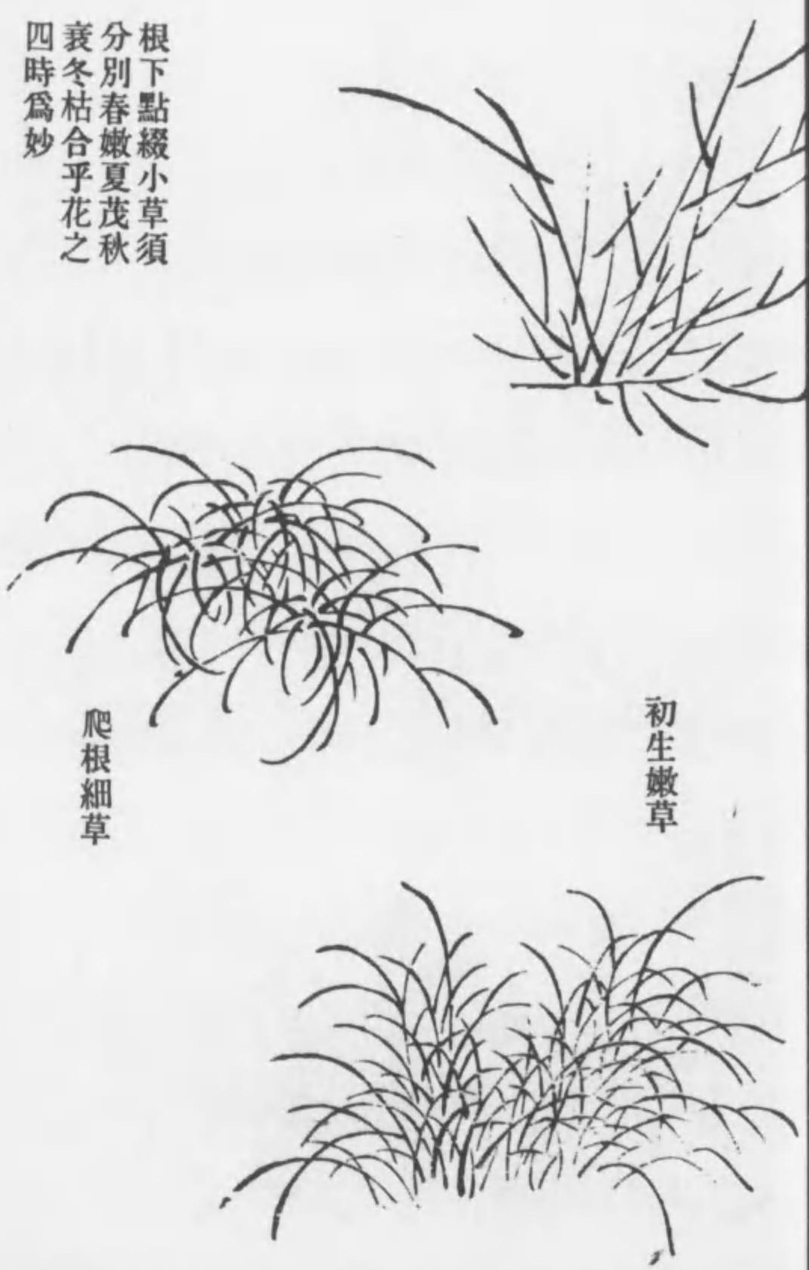
初生の嫩草（春初めて生えたる若草）

爬根の細草（根もとに爬ひまはりて生えたる細き草）

根下の點綴の小草は、須く春嫩・夏茂・秋衰・冬枯を分別すべく、花の四時に合するを妙と爲す。

解　根もとにあしらふ小さい草は、春は若草、冬は茂りたる草、秋は衰へたる草、冬は枯れたる草を區別して用ふることを要する。花の四時に合ふのを妙とする。

根下點綴小草須
分別春嫩夏茂秋
衰冬枯合乎花之
四時爲妙



尖點の苔草（尖りたる點を以て畫きたる苔草）

圓點の苔草（圓き點を以て畫きたる苔草）

露を承けたる苔草

根下の野薺（なづな）

根下の蒲公英（たんぽぽ）

野薺・蒲公英の二草は、能く雪霜に耐ふ。宜しく菊梅蘭根の下に安くべし。

解　なづな・たんぽぽの二種の草は、冬の雪や霜にも枯れないものであるから、菊や梅や蘭の根もとに書き入れるに宜しい。

攢三聚五苔（どちや〳〵の點を以て畫きたる苔）

下垂の細草（下に向つて垂れたる細草）

上仰の細草（上に向つて仰ぎたる細草）

根下の蒲公英（たんぽぽ）

草蟲點綴式一　蛺蝶

側面平飛（平かに飛んで居る蝶の側面）

反面

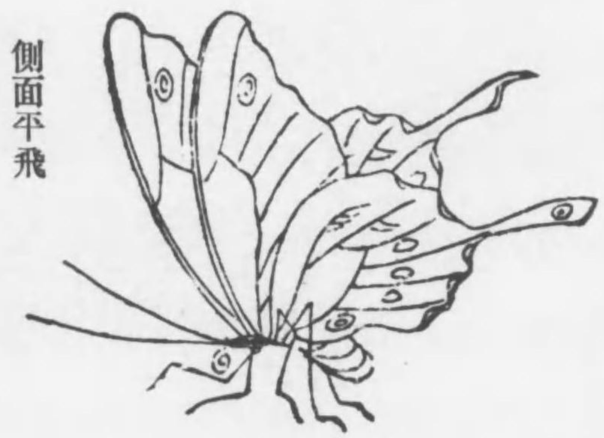
正面

折翅下飛（翅を折れるやうに動かして下に向つて飛んで居る蝶）

側面

歇花（花の上にとまつて居る蝶）

草蟲點綴式一蛺蝶



側面平飛

正面

反面

折翅下飛

側面

歇花

草蟲點綴式二　蜂　蛾　蟬

細腰峰

採花峰

鋏蜂

青蜂

草蟲點綴式二　蜂　蛾　蟬

採花蜂（みつばち）

青蜂

細腰蜂（じがばち）

鋏蜂（くまばち）
（鋏は蜾の古字）

飛蛾（飛んで居る蛾）

雙蛾（二匹の蛾）

正面墜枝の蟬（垂れ下りたる枝にとまりたる正面の蟬）

反面の枝を抱く蟬（小枝にとまりたる反面の蟬）

雙蛾

飛蛾

反面抱枝蟬

正面墜枝蟬

草蟲點綴式三　蜻蜓　蚱蜢　蟋蟀

正飛の蜻蜓（飛んで居る正面のとんぼ）

側飛の蜻蜓（飛んで居る側面のとんぼ）

蟋蟀（こほろぎ）

飛蜓（飛んで居るとんぼ）

草蟲點綴式三　蜻蜓　蚱蜢　蟋蟀

正飛蜻蜓

飛蜓

側飛蜻蜓

蟋蟀

螽斯（はたおり）

豆娘（せすぢつゆむし）

下飛の蚱蜢（下に向つて飛んで居るはたはた）

草上蚱蜢（草の上にとまつて居るはたはた）

螽斯

下飛蚱蜢

草上蚱蜢

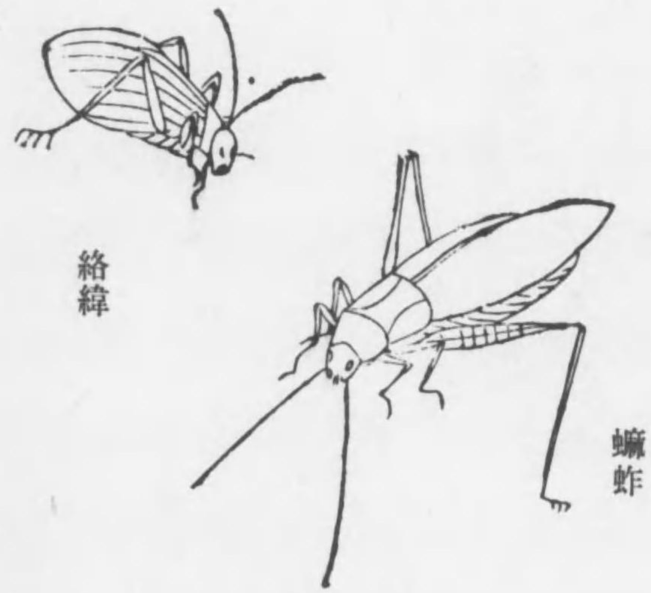
豆娘

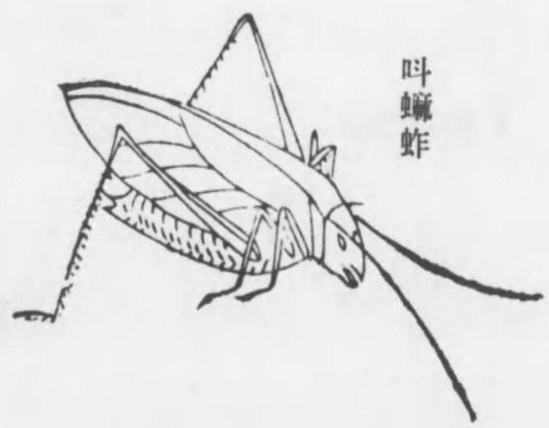
草蟲點綴式四　蠟蚱　絡緯
螳螂　牽牛

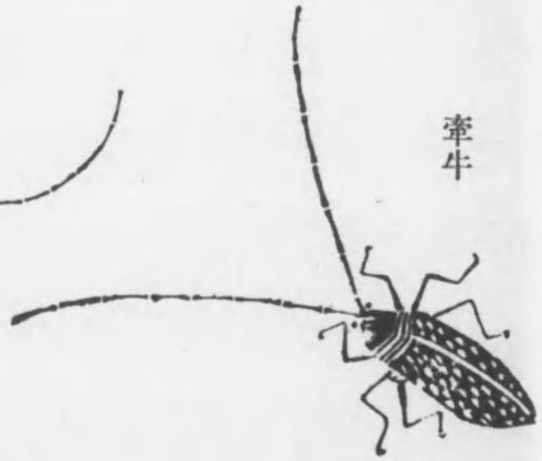
蠟蚱（〜つわむし）
叫蠟蚱（鳴いて居る蠟蚱）
絡緯（きりぎりす）

螳螂（かまきり）
牽牛（かみきりむし）
蟲を攫める螳螂
下行の牽牛（下に向つて歩いて居るかみきりむし）

草蟲點綴式四　蠟蚱　絡緯　螳螂　牽牛







301
40

昭和十年七月十五日印刷
昭和十年七月二十日發行

豫約會費
壹圓參拾錢

全譯 芥子園畫傳
第十冊 草蟲花卉瀟（上冊）

編者 小杉放庵
編者 公田連太郎
東京市牛込區喜久井町三四
發行人 北原義雄
東京市豊島區高田南町一丁目一九五
印刷所 美術印刷株式會社
東京市牛込區四五軒町三四
製本所 福山印刷製本所
東京市牛込區四五軒町三四
發賣所 福山書店
電話牛込四三六〇
東京市牛込區喜久井町三四
發行所 アトリエ社
電話 牛込 六四二一番
振替東京六六〇〇二番

第十冊終

落